日田市埋蔵文化財調査報告書第50集

大肥遺跡 I

－A-1区の調査の記録－

２００４年

日田市教育委員会

大肥遺跡遠景

序　　文

古来より九州の交通の要所であった本市には、多くの文化財が市内各所に残されています。

この中でも、市西部の大肥川一帯に広がる谷地は北部九州への玄関口として、数多くの遺跡が分布することが近年明らかになりつつあります。

さて、この地域では平成９年度より大規模な農業基盤整備事業が施工され、工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、当委員会では事前に発掘調査による記録保存を実施してまいりました。

本書は、そのなかでも平成１４年度に県営圃場整備事業大明地区大肥工区に伴って発掘調査を行った、大肥遺跡の一部の調査内容をまとめたものです。

遺跡の調査では、古墳時代初頭の溝跡や古代から中世の生活跡などが発見され、なかでも、溝跡から出土した古墳時代初頭の土器や土坑から出土した土器などは水場の祭祀が行われた痕跡と考えられ、当時の生活の様子を示すものとして注目されます。

本書が、市民の方々の埋蔵文化財に対するご理解と保護につながり、地域の歴史の解明や学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力いただきました関係者の方々に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

平成１６年３月１９日

日田市教育委員会
教育長　諫山　康雄

例　　言

１．本書は、日田市教育委員会が平成１４年度に実施した大肥遺跡Ａ―１区の発掘調査報告書である。

２．調査は県営圃場整備事業大明地区に伴い、大分県日田地方振興局の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。

３．調査にあたっては大分県日田地方振興局耕地課、日田市経済部農政課、大明地区圃場整備組合組合長　森山有男氏の協力を得た。

４．調査現場での写真撮影・実測は行時・渡邉が行い、一部実測を雅企画有限会社に委託し実施した。

５．本書に掲載した遺物実測は渡邉が行い、製図は㈱九州文化財リサーチの委託によるものを使用した。また、藤野美音の多大な協力を得た。

６．空中写真撮影は有限会社スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。

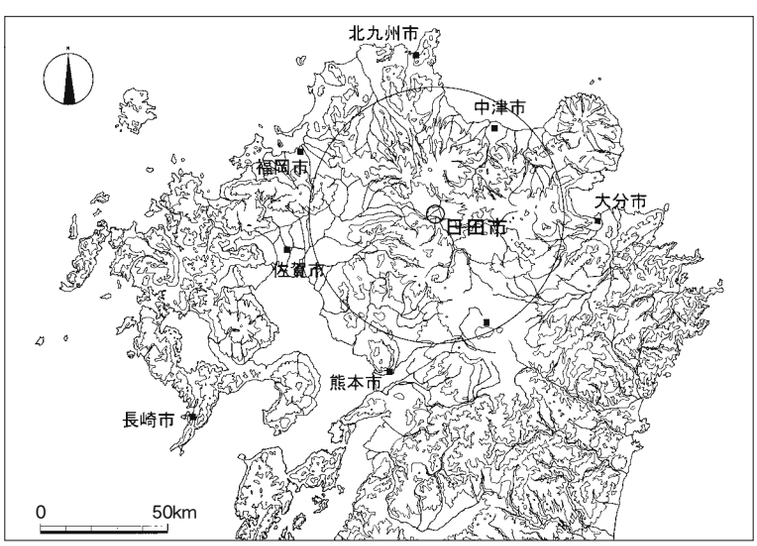
７．遺物の写真撮影は長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。

８．本書に使用した図面中の方位は、全体図が国土座標を使用し、個別遺構図は磁北で表示している。

９．写真図版に付している数字番号は挿図遺跡番号に対応する。

10．出土遺物および図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。

11．本書の執筆編集は行時と協議し、渡邉が担当した。



日田市の位置

目　　次

Ⅰ　はじめに…… 1
（1）　調査の経緯 …… 1
１．これまでの発掘調査概要…… 1
２．平成 14 年度の調査経緯 …… 3
（2）　大肥遺跡の調査経過 …… 6
（3）　Ａ―１区の調査経過と調査組織 …… 10

Ⅱ　遺跡の立地と環境
（1）　遺跡の位置と地理的環境 …… 12
（2）　歴史的環境 …… 12

Ⅲ　調査の内容
（1）　調査の概要 …… 15
（2）　基本層序 …… 17
（3）　第１面の遺構と遺物 …… 17
（4）　第２面の遺構と遺物 …… 21

Ⅳ　まとめ …… 34

挿　図　目　次

第 1 図　圃場整備事業区域と調査区位置図（1/25,000） …… 2
第 2 図　竹本工区試掘調査位置図（1/6,000）…… 3
第 3 図　大肥工区試掘調査区位置図（1/6,000）…… 4
第 4 図　Ａ・Ｂ区周辺地形図（1/5,000） …… 7
第 5 図　Ａ・Ｂ・Ｃ区遺構配置図（1/600）…… 8
第 6 図　遺跡分布図（1/6,000）…… 9
第 7 図　基本土層図（1/40）…… 15
第 8 図　第１面遺構配置図（1/400）…… 16
第 9 図　１号竪穴遺構実測図（1/40）…… 18
第 10 図　１号掘立柱建物実測図（1/40）…… 18
第 11 図　１号炉跡遺構実測図（1/20）…… 19
第 12 図　第１面遺構出土遺物実測図（1/3） …… 19
第 13 図　第１面上層水田層、遺物包含層出土遺物実測図（1/2、1/3）…… 20
第 14 図　第２面遺構配置図（1/400）…… 22
第 15 図　土層実測図（1/40）…… 23
第 16 図　１号溝実測図（1/40、1/80） …… 25

第 17 図　1 号溝出土遺物実測図①（1/3）…… 26
第 18 図　1 号溝出土遺物実測図②（1/3）…… 27
第 19 図　2 号溝実測図（1/40、1/200）…… 28
第 20 図　3、4 号溝実測図（1/40、1/80）…… 29
第 21 図　5 号溝実測図（1/3）…… 30
第 22 図　2 ～ 5 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 30
第 23 図　1 号土坑実測図（1/30）…… 31
第 24 図　1 号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 31
第 25 図　第 2 面遺物包含層出土遺物実測図（1/3）…… 33

挿入写真目次

写真１　Ａ―２区の調査風景……６
写真２　木甲出土状況……９
写真３　三叉鍬出土状況……９
写真４　甕棺出土状況……９
写真５　小児用甕棺出土状況……　９
写真６　機械作業風景…… 11
写真７　調査風景…… 11
写真８　基本土層…… 15

写真図版目次

巻頭図版　Ａ―１区遠景
図版１　上段　上層完掘（北から）
　　下段　第２面全景（真上から）
図版２　上段　第２面北側（真上から）
　　下段　第２面南側（真上から）
図版３　上段　１号掘立柱建物（南西から）
　　中段　１号炉跡
　　下段　調査区土層①
図版４　上段　調査区土層②
　　中段　調査区土層③
　　下段　１号溝完掘（北から）
図版５　上段　１号溝土層
　　中段　１号溝土器出土状況①
　　下段　１号溝土器出土状況②
図版６　上段　１号溝土器出土状況③
　　中段　１号溝土器出土状況④
　　下段　１号溝土器出土状況⑤
図版７　上段　１号溝土器出土状況⑥
　　中段　１号溝土器出土状況⑦
　　下段　２号溝完掘（東から）
図版８　上段　２号溝土層①
　　中段　２号溝土層②
　　下段　３号溝完掘（北から）
図版９　上段　３号溝土層
　　中段　１号土坑完掘（南から）
　　下段　１号土坑土器出土状況
図版 10　出土遺物写真①
図版 11　出土遺物写真②
図版 12　出土遺物写真③
図版 13　出土遺物写真④

表　目　次

表１　県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧
表２　大肥遺跡調査区一覧
表３　出土遺物観察表①
表４　出土遺物観察表②

Ⅰ　はじめに

大明地区一帯は古代の条里跡として周知されてきたため、これまで遺跡名を「大肥条里大肥地区」として報告してきた。しかし、この一帯での発掘調査の結果、条里跡は確認出来なかったことから、遺跡名称として不適当と判断されるため、本書より『大肥遺跡』と改めることとする。ただし、大肥条里大肥地区はこれまでの契約名称であり、今後も契約が継続することから、契約名称としては「大肥条里大肥地区」を使用することとする。また、他の条里地区の遺跡名は契約上の名称でもあるため、今回は変更せずにこれまでの遺跡名として掲載することとする。

(1) 調査の経緯

1．これまでの発掘調査概要（第１図）

県営圃場整備事業大明地区は、日田市西部に位置する谷地である大明地区一体の 105ha を対象として基盤整備を実施すると同時に、共同営農や農産物加工所の建設、農芸工作物生産団地の実施なども含めたモデル営農団地を創設することを目的に平成９年度より事業が実施された。平成９年４月には大明地区全体の工事対象箇所に関する埋蔵文化財の所在についての照会文が提出され、これを受けて事業主体者である大分県日田地方振興局と市教育委員会の両者による埋蔵文化財の取り扱いの協議を実施することとなった。

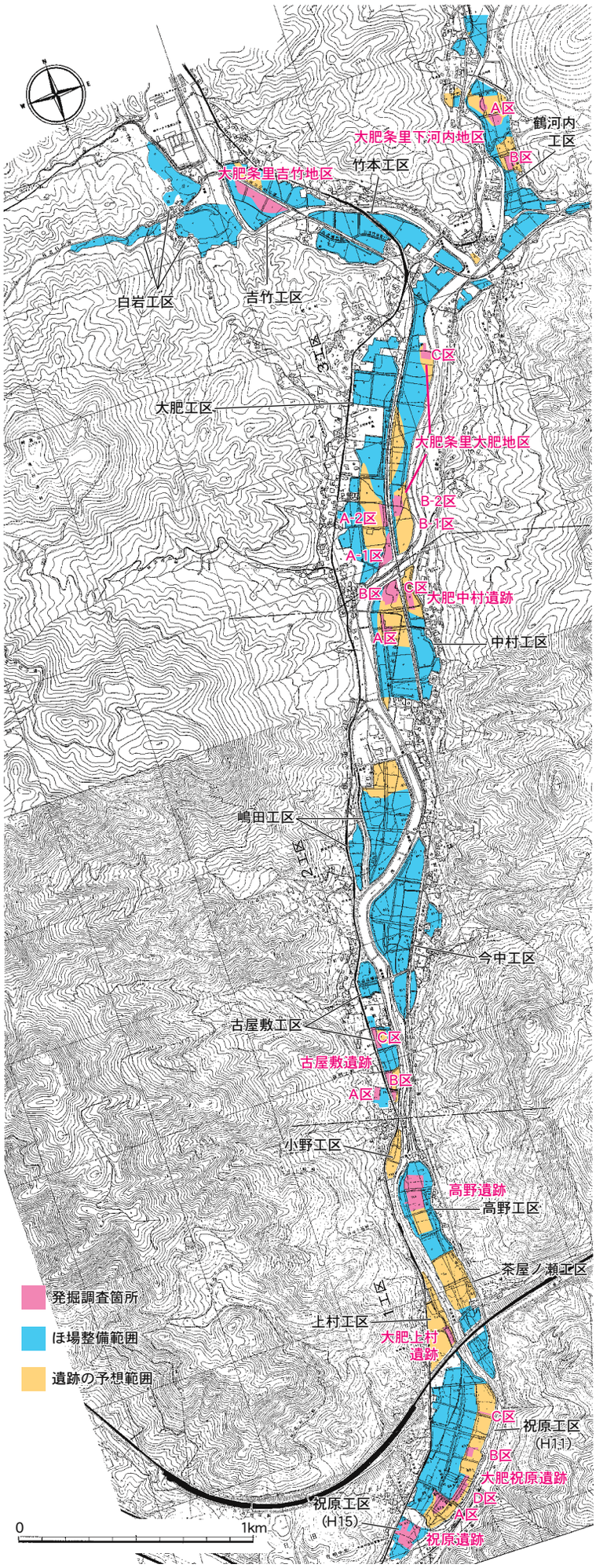
さて、これらの協議の結果、対象地域が周知の遺跡（大肥条里遺跡）に含まれること、基盤整備工事は全部で 14 工区（大まかには３工区）に分かれ年度ごとに工区毎の工事を実施する計画であることなどから、各工区毎に事前の試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は平成９年 10 月から平成 14 年 11 月までの各年度に実施され、そのうち遺跡の存在

第１表　県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧

試掘年度	工区名	遺構内容	時代	処置	遺跡名	発掘調査年度	調査期間	調査面積（㎡）	備考
平成９年度	嶋田工区	柱穴、包含層	古代・中世	盛土保存	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成９年度	今中工区	なし	－	許可	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成９年度	中村工区	住居跡、石棺墓、小児用甕棺墓	弥生時代～中・近世	発掘調査	大肥中村遺跡	平成 10 年度	98.07.07～98.12.30	10,000	A～C区、概報刊行
平成 10 年度	祝原工区	溝・土坑・柱穴	縄文時代～弥生時代	発掘調査	大肥祝原遺跡	平成 11 年度	99.05.16～00.01.17	5,100	A～D区、A～C区は報告済
平成 10 年度	上村工区	竪穴・溝・土坑・柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	大肥上村遺跡	平成 11 年度	99.09.28～99.10.29	950	報告済
平成 10 年度	茶屋丿瀬工区	竪穴、溝、土坑、柱穴	中世	盛土保存	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成 10 年度	小鶴工区	竪穴住居、溝、柱穴	弥生土器	盛土保存	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成１１年度	鶴河内工区	柱穴、土坑、包含層	縄文時代～中世	発掘調査	大肥条里遺跡下河内地区	平成 12 年度	00.12.04～01.02.28	5,950	
平成１１年度	吉竹工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	古墳時代～中世	発掘調査	大肥吉竹遺跡	平成 12～13 年度	01.01.29～01.05.24	8,270	
平成 13 年度	大肥工区	竪穴住居、流路、甕棺墓、石棺	弥生時代～古墳時代	発掘調査	大肥条里遺跡大肥地区	平成 14 年度	02.05.27～03.02.13	8,200	A～C区
平成 13 年度	竹本工区	なし	－	許可	－	－	－	－	試掘調査のみ
平成 14 年度	高野工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	高野遺跡	平成 14～平成 15 年度	03.01.16～03.10.20	9,200	
平成 14 年度	古屋敷工区	溝、土坑、柱穴	縄文時代～中世	発掘調査	古屋敷遺跡	平成 15 年度	03.05.19～03.10.19	7,100	A～C区
平成 14 年度	祝原工区	溝、土坑、柱穴	中・近世	発掘調査	祝原遺跡	平成 15 年度	03.05.19～03.08.04	4,500	
平成 14 年度	白岩工区	なし	－	許可	－	－	－	－	試掘調査のみ

※網掛けは発掘調査実施遺跡



第１図　圃場整備事業区域と調査区位置図（1/25,000）

が明らかとなった箇所については、再度、各遺跡の取り扱いについて協議を行った。工法の変更等を検討したものの、遺跡の現状保存が困難である対象箇所に関しては、次年度に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

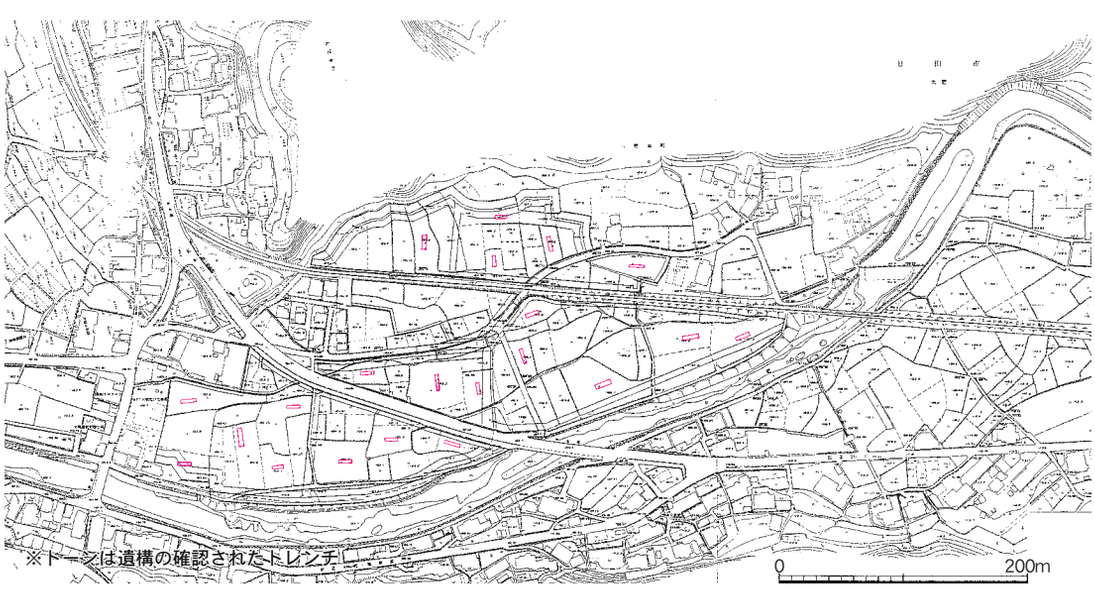
平成 10 年度には大肥中村遺跡、平成 11 年度には大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡、平成 12 年度には大肥条里遺跡下河内地区、平成 12 ～ 13 年度には大肥吉竹遺跡、平成 14 年度には大肥条里遺跡大肥地区、平成 14 ～ 15 年度には高野遺跡、平成 15 年度には古屋敷遺跡、祝原遺跡の計 9 箇所の発掘調査を実施した。

なお各工区の調査内容については表 1 のとおりである。

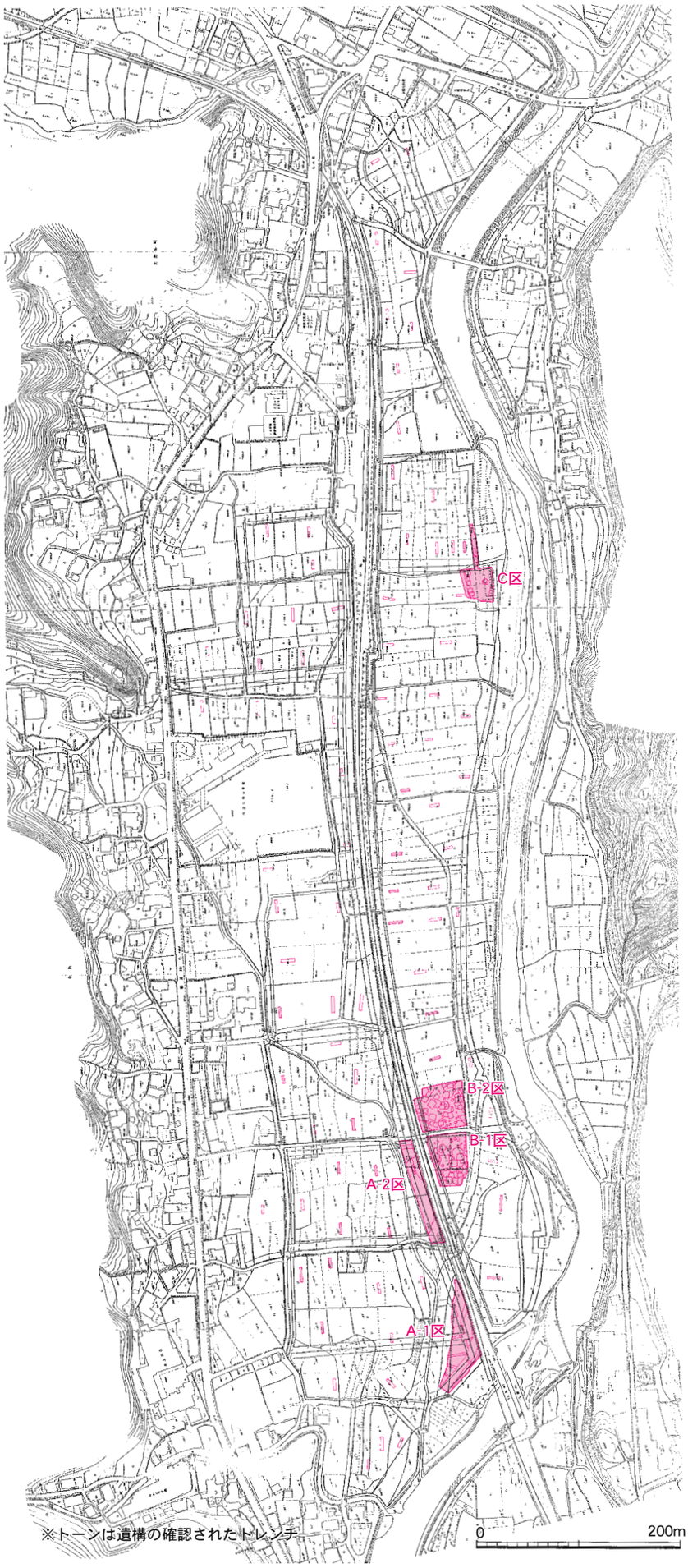
２．平成 14 年の調査経緯

前項に記載したように、県営圃場整備事業大明地区の工事が推進されるなかで、平成 13 年 12 月には竹本工区、大肥工区（対象面積 25ha）の試掘調査依頼が提出された。これを受けて、市教育委員会では平成 14 年 2 月 12 日～ 3 月 4 日までの期間試掘調査を実施した。両工区合わせて計 118 本のトレンチを設定し調査を行った結果、竹本工区（第 2 図）では包含層は確認されたものの、遺構の存在は確認されず、大肥工区（第 3 図）では遺構の存在する箇所が明らかとなった。しかも、これの遺構の存在する箇所の範囲は約 5ha 程と広範囲に及んでいた。この結果を受け、平成 14 年 4 月に遺構の確認された箇所について、大分県日田地方振興局耕地課（以下、県耕地課）との間で、遺跡の取り扱いについて協議を実施することとなった。この内、掘削が遺構面まで達せず、掘削面が遺構面を保護するのに十分な深さを保つと見込まれる箇所、および盛土保存される箇所については工事を許可することとし、掘削が遺構面に達する残りの箇所について検討することとなった。この時点での掘削対象面積は約 2ha ほどになっていたものの、極力遺跡の破壊を免れることを方針として、県耕地課に対し、工法の変更を依頼することとした。その結果、工法変更の可能な箇所に関しては盛土保存を行うこととなり、用水路や道路の設置などに伴い遺跡の保存が困難な箇所約 1ha ほどを対象に調査を実施することとなった。

最終的に調査対象となった箇所は全部で 5 箇所に及び、これらは広範囲な工事対象地内に点在していることから、遺跡名称としては大肥条里大肥地区として統一し、各地点毎に調査区名称を分けることとし、対象地内を JR が横断していることなどの理由から、JR の西側を A 区、東側を B



第２図　竹本工区試掘調査位置図（1/6,000）



第３図　大肥工区試掘調査区位置図（1/6,000）

区と分け、やや北側に位置する箇所をＣ区とすることとした。また、道路などでＡ、Ｂ区はそれぞれ分断されていることから、A-1 区、A-2 区、B-1 区、B-2 区として区分けすることとした。

ただし、この内Ｂ区の約 5,000 ㎡ほどに関しては今後の周辺作業との関連で盛り土保存が可能かどうかの検討を行いたいとの申し出が県耕地課よりあり、ひとまず、これらの箇所に関しては調査対象とするものの、別地点を調査している間に検討を行い、再度協議を実施することとなった。

大分県日田地方振興局長名による埋蔵文化財発掘の通知文が提出され、その後、平成 14 年５月 20 日付けで市と大分県日田地方振興局耕地課との間で委託契約を結び、同 27 日より発掘調査を開始することとなった。なお、契約については、工事の実施区域が JR を挟んだ東西で別工事としていることや工事開始時期が異なることなどの理由から、Ａ区とＢ区（C 区を含む）に分けて契約することとなった。

調査は A-1 区より開始したが、その間の５月には、先述したＢ区を盛り土保存するかどうかの検討がなされ、工法変更により盛土保存を実施することとなり、調査対象から外れることで一旦話しがまとまったものの、その後、A-1 区の調査中の６月中旬に B-2 区の工事が実施され、耕作土除去作業中に、石棺墓の露出が確認された。また、遺構面が現況水田基盤土直下に位置し、耕作土を除去した時点で大量の遺構と遺物の存在が眼前に広がっており、石棺墓以外にも、やや土圧で崩落しているものの、小児用甕棺墓の存在も多数確認された。そこで、県耕地課と遺跡の取り扱いについて再度協議することとなった。

この調査区周辺は工法変更により盛り土保存されることとなったものの、対象となる 5000 ㎡の範囲に遺構が密に広がっている恐れがあり、また、石棺墓や甕棺墓などの墓域が広がっている可能性が高いことが想定された。特に、石棺墓や甕棺墓などは空洞化していることから、工事の際に土圧による遺構の破損が予測され、また、工事が完了後の水田耕作中にトラクター等が落ち込むなどの危険性が伴うことから、調査が必要であることを理解いただいた。しかし、既に盛り土にて遺構の保存が計画されていること、翌年の耕作に間に合うべく工期が既にこれらを見込んで実施されており、非常に高い密度のこの区域を完全に調査することは期間、費用、体制などの面において困難であると判断された。そこで、対象となる範囲の遺構検出を行い、墳墓群を中心として調査をすることとし、住居跡や土坑、柱穴などは墳墓群にかかるものは完掘し、それ以外は確認に留めて調査することとした。また、調査後にはこの範囲は真砂土にて埋め戻すこととした。

そこで、契約に関しては頭初どおり、Ａ～Ｃ区までの調査を実施することとなった。

契約期間は大肥条里大肥地区Ａ区が平成 14 年５月 20 日から平成 15 年３月 20 日、大肥条里大肥地区Ｂ区（C 区を含む）が平成 14 年５月 20 日～平成 15 年３月 20 日までの期間で委託契約を交わし、調査はＡ区が平成 14 年５月 27 日より開始し、Ｂ区は平成 14 年６月 21 日に開始した。また、整理作業はＡ区は平成 14 年６月６日より開始し、Ｂ区は平成 14 年９月２日に開始した。なお、各地点並行して整理を行い、平成 15 年度には調査時の都合により区分けされていた契約を、整理作業と報告書作成のみの作業であることから、一本化し平成 15 年４月 14 日から平成 16 年３月 19 日までの期間契約を取り交わし、整理作業報告書作成作業を実施し、随時各地点の整理を進めている。

なお、試掘調査時に出土した各トレンチの遺物については、今後予定される各区の報告において紹介することとし、今回の A-1 区の報告に際しては周辺において関連する遺構が確認されていな

いことなどから割愛している。

(2) 大肥遺跡の調査概要

調査は平成 15 年 5 月 27 日から A-1 区より開始した。ちょうど梅雨時期であることから現場の水没などがたびたび発生した。6 月末には前節にて述べた墳墓群の確認された B-2 区の調査を開始し、平行して実施していた A-1 区の調査は 7 月中旬には終了した。7 月末には C 区の調査を開始し、8 月中旬には A-2 区の表土除去を開始した。同時に 3 箇所の現場を実施する状況が続き、各地点にて出土する遺構の密度が高いことなどから調査は困難を極めた。そのなかで、徐々に各地点の調査を終了することができ、8 月後半には B-2 区、9 月中旬には C 区の調査を完了した。また、A-2 区は表土の除去を行ったものの、目くら暗きょうなどの撹乱が縦横無尽に見られ、残存する遺物の量が多く、有機質遺物の存在も確認されたことから、まず撹乱坑の除去に大部分の時間を要し、調査に大きく遅れが生じた。9 月後半には B-1 区の調査が開始され、B-2 区を倍以上上回る墳墓群が確認されるとともに、残存状況のよい成人用甕棺墓が存在していることが明らかとなった。そこで、ひとまず A-2 区と B-1 区の調査を平行して行い、B-1 区の墳墓群の調査に主力を置くこととした。その中で 11 月後半には墳墓群の調査が完了し、その後、真砂土にて盛り土保存を行った。その後 A-2 区の調査に全力が注がれることとなった。しかし、遺構が流路であり、多数の木器などが出土するとともに、現場内に大量の水が流れ込む状況などから調査は困難を極め、大幅な工程の遅れを生じることとなった。また、調査時期が冬に差し掛かり、積雪や現場の凍結などに悩まされる状況が続き、再三に渡り、県耕地課との間にて協議を繰り返し、調査期間の延長を図るとともに、調査には灯光機などを用いて深夜までの作業を実施し、昼夜、天候を問わず作業を実施することで調査の遅れを回復する努力が続けられた。その中で、三叉鍬などの木製品が大量に見られたことから 12 月 24 日には大肥遺跡全体の調査成果と日田では初例となる弥生時代の木製品の出土について記者発表を実施することとなった。努力のかいもあってか作業が順調に進む中で、1 月には多彩な遺構の存在とともに木製の鎧（以下木甲）が発見された。県内初例であることもあり、2 月 4 日に再度調査成果を発表することとなった。その後、作業は順調に進み、遺構の完掘と測量を完了させ、2 月 13 日には調査を完全に終了した。各調査区の調査面積と調査期間については下表のとおりである。

表 2　大肥遺跡調査区一覧

地区名	面積（㎡）	期間	備考
A -1	2,800	02.05.27 ～ 02.07.24	
A -2	1,000	02.08.19 ～ 03.02.13	
B -1	1,500	02.09.24 ～ 02.11.29	盛土
B -2	1,800	02.06.21 ～ 02.08.30	盛土
C	1,100	02.07.29 ～ 02.09.20	

写真 1　A-2 区調査風景

なお、各調査区の概要を略述する。

A-2 区

弥生時代前期末から後期末の流路が 4 条確認され、特に調査区を東西に横断する流路からは大量の土器や石器とともに、三叉鍬などの多彩な木製品や黒漆の施された木甲や高坏などが出土した。流路内には堰が設けられ、下流に水さらし遺構や導水施設も見られた。調査区南には建物群が見られ、この流路が集落の側を流れていたものと考えられ、集落や墳墓が確認されたＢ区を囲うように流れていることが明らかとなった。試掘調査の成果などと併せて考えると、流路は本流である大肥川の支流として集落を囲むように流れ、環濠の役割を果たしていたものと考えられる。（第 4 図）また、対岸には中期の墳墓群の出土した大肥中村遺跡が見られ、この一帯が弥生時代の拠点集落であったことが伺える。

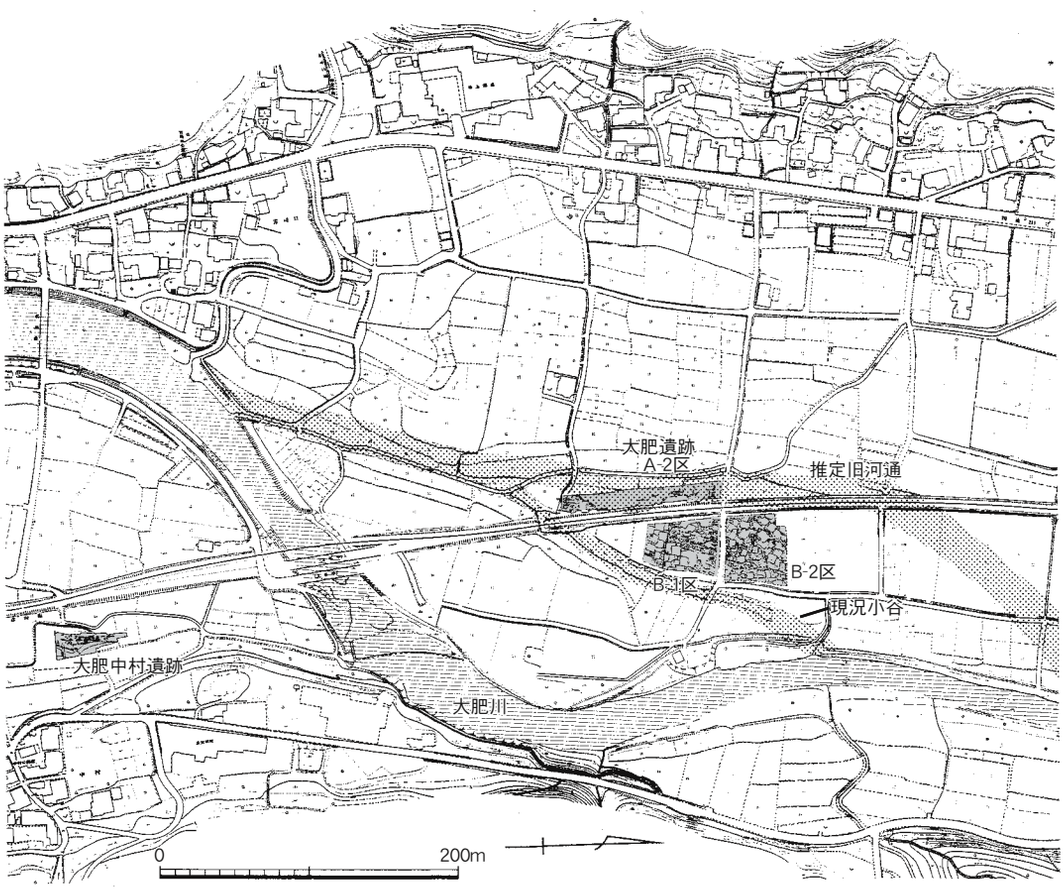
B-1 区

成人用甕棺墓 5 基、小児用甕棺墓 35 基、石棺墓 6 基、木棺墓 2 基、竪穴住居跡 50 軒以上、土坑、柱穴多数

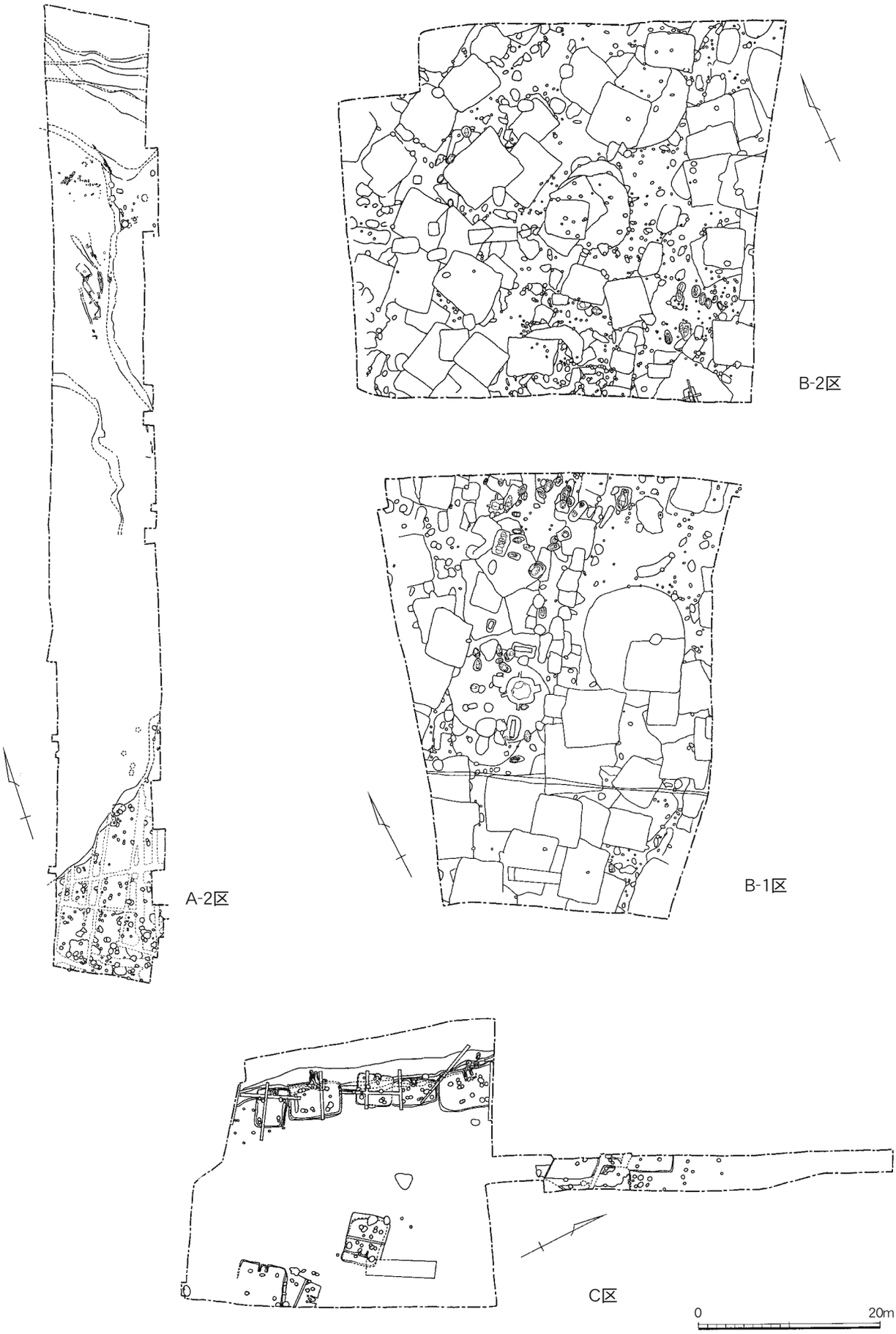
B-2 区

小児用甕棺墓 17 基、石棺墓 2 基、方形周溝状遺構 1 基、竪穴住居跡 50 軒以上、土坑、柱穴多数

以上のような遺構の内容がＢ区では確認され、確認調査に留めている箇所が大部分に及ぶことから詳細は把握できていないが、弥生時代前期末から古代にいたるまで、かなりの密度で遺構が集中していた。特に墳墓群は弥生時代前期末から後期まで継続しており、成人棺は弥生中期中頃から



第４図　Ａ，Ｂ区周辺地形図（1/5,000）



第５図　A、B、C区遺構配置図（1/600）

後半のものが見られた。河道に囲まれる集落と墳墓群であり、中洲状の地形を呈する居住地内を長期間にわたって占住していたことでこのような密集した集落となったものと考えられる。

C 区

ややA、B 区とは離れた位置にあるC 区では古墳時代の竪穴住居跡 15 軒や土坑小児用甕棺墓などが確認された。大肥川の真横に立地していることから、地山に砂礫層が見られ、遺構はこの中で比較的安定している砂層を選んで構築されていた。住居跡の時期は 5 世紀後半から 6 世紀中頃に該当する。また、住居跡に流れ込んだ状態で縄蓆文土器が出土し、朝鮮系遺物の出土が日田では初めて確認された。

《参考文献》

行時桂子編ほか「大肥条里大肥地区」『平成 14 年度（2002 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2003 年

行時志郎編　　『大肥中村遺跡 - 発掘調査概報 -』日田市教育委員会　2002 年

写真 2　木甲出土状況

写真 3　三叉鏃出土状況

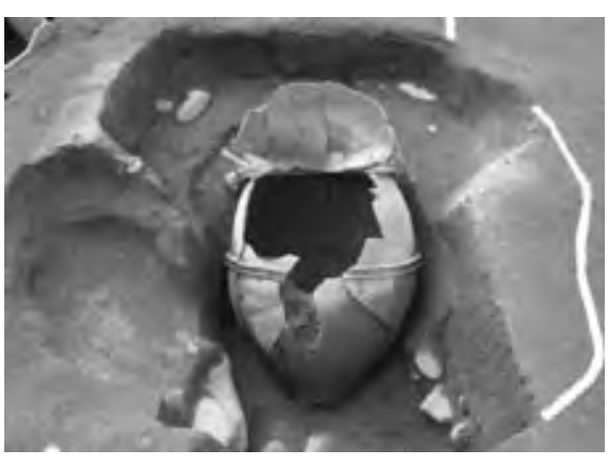


写真 4　甕棺出土状況

写真 5　小児用出土状況

(3) A-1 区の調査経過と調査組織

大肥遺跡 A-1 区の調査経過については、調査日誌に基づき略述する。

5月27日／機械を使って表土剥ぎを開始する。
6月 3日／作業員を使って、遺構検出を開始する。
6月12日／第1面の遺構の掘り下げを始める。
6月17日／下層に遺構が存在することが確認される。
6月18日／第1面の遺構の掘下げと測量が完了する。
6月19日／機械を使って第2面の掘下げを実施する。
6月25日／第2面の遺構検出を行い、遺構の掘下げを実施する。
7月 1日／梅雨時期に入り現場の水没や雨天が多く作業が遅れる。
7月18日／空撮の為、清掃を開始する。
7月22日／遺構の掘下げと測量が完了する。
7月24日／調査を完全に終了する。

なお、調査関係者は以下のとおりである。なお、A～C区全てに及び記載している。(職名は当時のままとしている。)

平成14年度（発掘調査）

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）
調査指導者　小田富士雄（福岡大学教授）、後藤宗俊（別府大学教授）、高倉洋彰（西南大学教授）
田中良之（九州大学教授）、下村智（別府大学助教授）
佐々木章（大分短期大学助教授）、山田拓伸（大分県立歴史博物館）
高橋徹（大分県教育委員会文化課）
調 査 統 括　後藤清（同文化課課長）
調 査 事 務　田中伸幸（同文化課文化財管理係長兼埋蔵文化財係長）
園田恭一郎（同文化課主査）、酒井恵（同文化課主事補）
調　査　員　土居和幸（同文化課主査）行時桂子（同文化課主任、調査担当）
若杉竜太（同文化課主事）渡邉隆行（同文化課主事、試掘担当、調査担当）
調査協力者　肥塚隆保、高妻洋成（独立行政法人奈良文化財研究所）
山田昌明（東京都立大学助教授）、石井芙美子（夜須町教育委員会）
来　訪　者　岩満聡、小林昭彦、渋谷忠章、重藤輝行、高橋信武、玉川剛司、宮内克巳
補　助　員　杉森久恵、藤野美音
発掘調査員　穴井昌生、池田貞夫、石井アヤ子、石井チエ子、石井俊政、伊藤智恵子、糸永和子、井上賢信、一ノ宮高喜、一ノ宮森男、岩本綾子、宇都宮貴仁、岡部進、岡部壽美恵、岡崎健治、梶原一二三、北向チズ子、五反田静子、後藤孝市、財津由太、財津利枝、坂本サツキ、高倉知子、田中昇、太郎良開、筒井英治、室井キミ子、森山熊夫、森山春義、森山八重子、森山國雄、森山夏雄、森山幸雄、森山征敏、森山文雄、

森山スミ子、森山純義、原田寅夫、平原知義、古田太、堀英子、三俣エイ子、山下アヤ子、山下勇美子、柳原貢、吉田勝秋、和田フミ子

整理作業員　朝倉眞佐子、穴井トミ子、石田紀代子、井上とし子、伊藤一美、伊藤弘子、石松裕美、宇野富子、鍛冶屋節子、梶原ヒトエ、川原君子、黒木千鶴子、佐藤みちこ、坂口豊子、坂本和代、田中静香、中原琴枝、聖川暢子、平川優子、安元百合、吉田千鶴子、和田ケイ子

平成 15 年度（整理作業、報告書作成）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）（～平成 15 年 7 月）
諫山康雄（日田市教育委員会教育長）（平成 15 年 8 月～）

調 査 統 括　後藤清（同文化課課長）

調 査 事 務　佐藤晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）園田恭一郎（同文化課主査）
酒井恵（同文化課主事補）

調　査　員　土居和幸（同文化課主査）行時桂子（同文化課主任）
若杉竜太（同文化課主事）渡邉隆行（同文化課主事、報告書担当）

調査協力者　藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）、古谷毅（東京国立博物館）

調査補助員　岡本彩、杉森久恵、藤野美音

整理作業員　朝倉眞佐子、穴井トミ子、井上とし子、伊藤一美、伊藤弘子、石松裕美、宇野富子、鍛冶屋節子、梶原ヒトエ、川原君子、黒木千鶴子、佐藤みちこ、坂口豊子、坂本和代、田中静香、中原琴枝、聖川暢子、平川優子、安元百合、吉田千鶴子、和田ケイ子

写真６　機械作業風景

写真７　調査風景

Ⅱ　遺跡の立地と環境

(1) 遺跡の位置と地理的環境（第６図）

大肥遺跡は日田市大字大肥字方司口に所在し、現在では大鶴町に該当する。

日田盆地の西部の谷地を流れる大肥川は日田市最北端に位置する岳滅鬼山に源を発する鶴河内川と福岡県小石原村に源を発する小石原川が谷の北部で合流した後、三隈川へと流れ込んでいる。こうした河川の浸食作用によって形成された地形面は、千田　昇氏の分類によれば「中位段丘２面」と呼ばれ、その説明では「中位段丘２面」は阿蘇４火砕流堆積面がさらに開析された時の地形面のこととされる。大肥川沿には河岸段丘や高位扇状地として主要な地形面を構成している。

こうして発達した河岸段丘の最も開けた場所に大肥遺跡は立地しており、この地点よりやや上流で鶴河内川との合流地点にあたり、そこより奥は一段と幅の狭い谷が形成されている。河岸段丘の標高は約 91 ｍを測る。遺跡のすぐ上流から西に向かうと谷は狭くなり、自然の城門のような様相を呈している。この箇所は近世において上座郡と日田郡との国境となっており、現在でも天保６年に建てられた国境石がその当時の国境の名残を残し､現在の福岡県との県境ともなっている。逆に、この谷地は南下して広くなっており、この一帯より南に多くの遺跡が見られ、大肥条里大肥地区、大肥中村遺跡、高野遺跡など縄文時代から中近世の遺跡が所狭しと所在するのである。

(参考文献)

中島　国夫　「日田盆地のなりたち」『日田市 30 年史』日田市　1974 年

千田　昇　「日田・玖珠地域の地形―とくに台地地形についてー」『日田・玖珠地域―自然・社会･教育―』大分大学教育学部　1992 年

行時　志郎　「２　遺跡の立地と環境」『大肥中村遺跡―発掘調査概報―』　2003 年

(2) 歴史的環境

この地域は近年の圃場整備に伴う調査によりその概要が明らかになりつつある。この地域で確認される生活の痕跡は縄文時代からである。大肥条里下河内地区[註1]では前期の集石炉などが調査され、古屋敷遺跡[註2]では前期の包含層が確認されている。大肥祝原遺跡[註3]では後期の集石や土坑などが発見されている。

弥生時代では拠点集落が幾つか確認されている。大肥条里大肥地区Ａ -2、Ｂ区[註4]では、前期末から後期の集落跡、成人用甕棺墓、小児用甕棺墓などの墳墓群とそれらを囲むように流れ環濠の役割を果たしていた旧河道などが発見されている。この旧河道からは三叉鍬や杓子、建築部材など大量の木製品が発見されており、特に木甲の存在は注目される。大肥中村遺跡[註5]では、中期から後期の墳墓群が発見され、高野遺跡[註6]では中期末から後期の拠点集落が確認されている。また、大肥祝原、大肥上村遺跡[註7]では中期から後期の土坑などが確認されている。

古墳時代の開始期には大肥条里大肥地区 A-1 区で前期初頭の流路や土坑などが確認され、水場の祭祀の痕跡が見つかっている。現在のところ中期の遺構は確認されていないが、後期には大肥条里大肥地区Ｃ区で５世紀後半～６世紀中ごろまでの竪穴住居群が確認され、住居跡への流れ込みでやや時代が異なるが、縄蓆文土器など韓国との交流を示す資料も発見されている。また、大肥中村遺跡では６世紀中ごろの住居が確認されている。

古墳時代の墳墓群は現在のところ確認されていないが、中島横穴墓[註8]など周辺の山間部に横穴墓の存在が知られ、また中村遺跡[註9]では箱式石棺墓の存在が確認されている。未調査であり、詳細は不明であるが、河岸段丘の周辺の高台などに墳墓群が存在した可能性が考えられる。

古代には、大肥吉竹遺跡[註10]にて大規模な集落跡が見つかっているほかには、あまり確認されていない。大肥中村遺跡では８世紀代の住居跡が発見されている。また、この地域は条里地割が残る地域として知られており、周知遺跡名も大肥条里遺跡とされている。しかし、近年の発掘調査ではこれら条里地割の痕跡は確認されず、水田の多くは、近世から近代にかけて大幅に改変されていることが分かってきている。『豊後国風土記』によれば、日田郡には５つの郷があり、有田、亘理、父連、石井、夜開の５郷があったと言われており、この地域が夜開郷にあたるのではないかと想定されている。また、1285 年に書かれた『豊後国図田帳』によれば、大肥川流域は「大肥荘」と呼ばれ、宇佐宮とならぶ安楽寺に寄進された水田地帯であったことがわかっている。この「大肥荘」は『天満宮安楽寺草創日記』に 1032 年、喜多院建立の際に寄進されたことが記述されていることから、それ以前には荘園開発が行われていたようである。

中世には、大肥中村遺跡で鍛冶工房や建物群、水田などが調査されている。また、中世墓も見つかっており、竜泉窯系青磁合子や湖州鏡などが見つかっており、多彩な中国系遺物を手に入れることの出来る程、鉄器の流通が盛んであったことが窺い知れる。また、高野遺跡では中世の建物群が調査され、古屋敷遺跡では中世建物群や溝跡、祝原遺跡[註11]では水田が見つかっている。大肥荘の時代の賑わいをこれらの遺跡は物語っている。

近世では大肥中村遺跡で江戸時代前期の建物群が見つかっており、祝原遺跡でも建物群が調査されている。

このように近年の調査により、多彩な遺跡の存在が明らかになりつつある大肥川流域は、九州の交通の要所である日田の西の玄関口として、古く縄文時代から現代にいたるまで脈々と生活が営まれ、また日田の歴史を解明する重要な地域となりつつあるのである。

《参考文献》

註 1）渡邉隆行編 「大肥条里下河内地区」『平成 12 年度（2000 年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001 年

註 2）平成 15 年発掘調査

註 3）若杉竜太編 「大肥条里祝原地区」『平成 11 年度（1999 年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001 年

註 4）渡邉隆行編 「大肥条里大肥地区」『平成 14 年度（2002 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2003 年

註 5）行時志郎編 「大肥中村遺跡 - 発掘調査概報 -」日田市教育委員会　2003 年

註 6）平成 15 年発掘調査調査

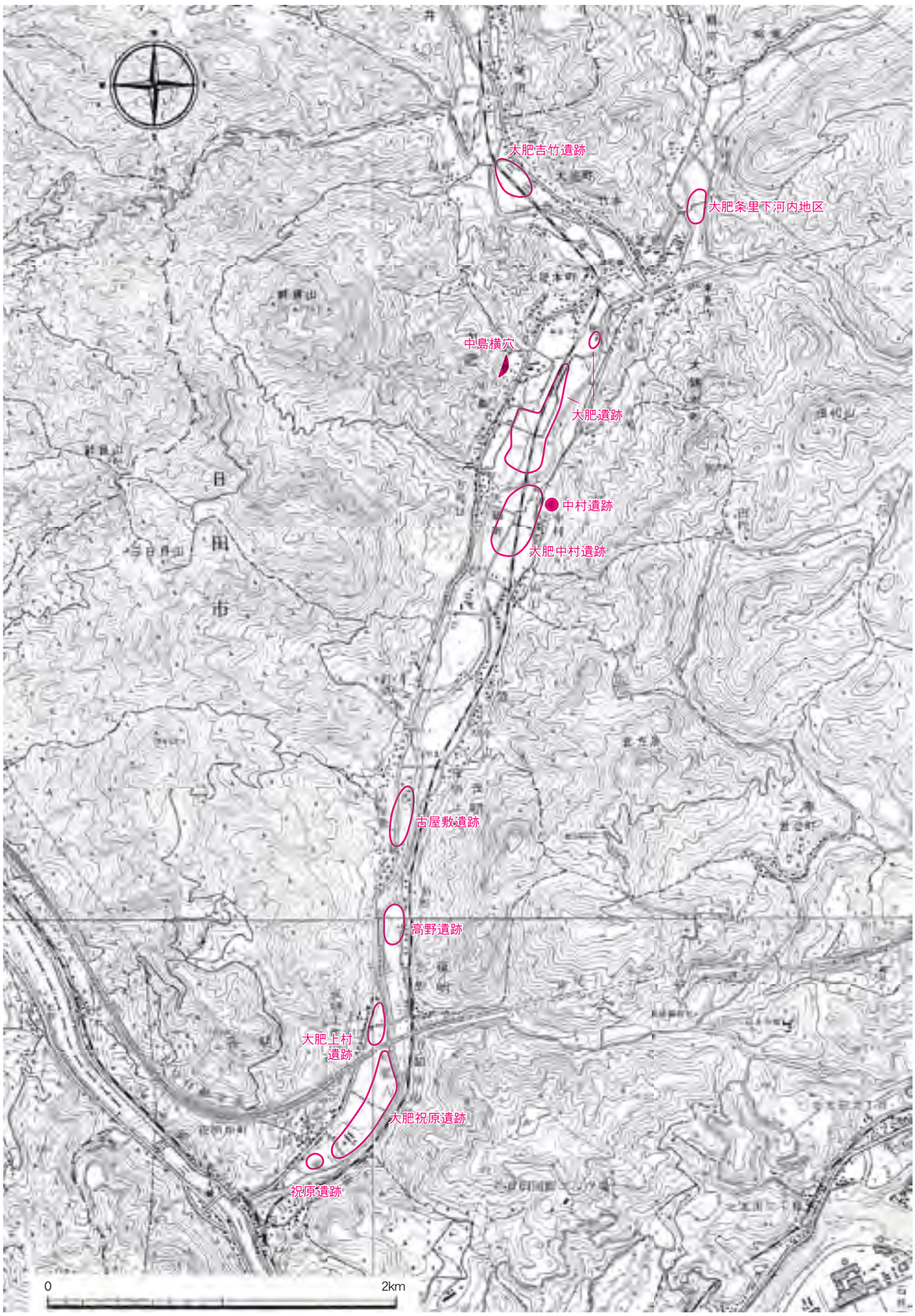
註 7）若杉竜太編 「大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 46 集　日田市教育委員会　2003 年

註 8）横穴の開口が確認されている。

註 9）工事中に発見されている。

註 10）渡邉隆行編 「大肥条里吉竹地区」『平成 13 年度（2001 年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2002 年
渡邉隆行編 「大肥吉竹遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書 48 集　日田市教育委員会　2004 年

註 11）平成 15 年発掘調査調査



第６図　遺跡分布図（1/30,000）

Ⅲ　調査の内容

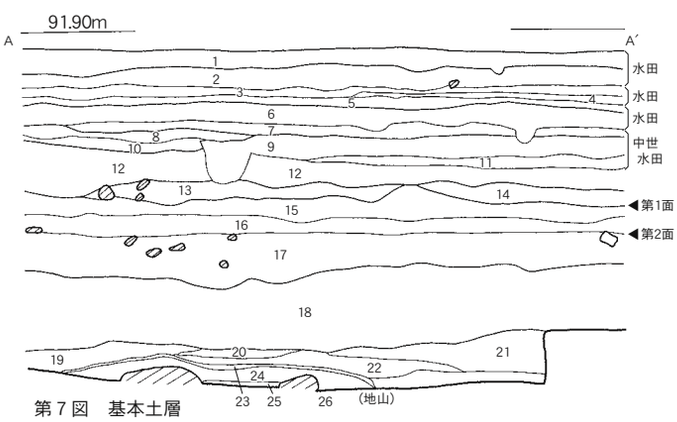
(1) 調査の概要

調査区はＪＲ線路を挟んだ工事予定区域内のうち西側に位置し、調査区よりやや北側は大肥川より伸びる小さな谷、南側は大肥川に挟まれる。この地点は調査区西側を流れる水路を作り変え、道路を設置する予定になっており、また周辺の一部を掘削して水田を作り変えることになっていた。

調査区は南北長約 110 m、東西長約 31 mを測る三角形状を呈し、調査区内での標高は約 91 m である。調査区北側は小谷側へとやや下がり、砂礫層が広がり、南側は大肥川へと沿って南西に向かって緩やかに傾斜していた。おそらく、北側の谷は形成時期は不明であるものの、大肥川の支流の小河川として機能し、本流である大肥川とともに調査区を囲んで流れ、調査区周辺は中州状地形を形成していたものと考えられる。調査区は中州状地形の端にあたり、河川の接する箇所に近かったことから、たびたび氾濫を受けていたものと考えられる。そのことを示すように地山は砂質土が堆積しており、やや下層には礫層が広がっていた。

調査は南東側より機械により表土除去から開始し、２層形成される水田層下部に灰褐色砂質層の地山が広がっており、この面にて遺構の存在が確認された（第１面）。南東側は自然地形により傾斜しているため､現況よりも１ｍほど下がり､北側は水田層が薄く堆積し､北へ行くほど掘削を受け、現況水田の基盤土直下に遺構面が広がっていた。この遺構面の上層に見られる水田層には古代～中世の遺物が包含されており、この水田層が中世水田層の可能性が考えられる。この面にて確認された遺構は、竪穴状遺構、掘立柱建物、炉跡、柱穴などであった。

その後、遺構の掘下げを実施する中で、検出される地山内に遺物の存在が認められたことから、数本のトレンチを設定し下層（第２面）の確認を実施した。また、調査区中央部付近は頭初の遺構検出時にやや掘り下げ過ぎている箇所があり、その箇所に溝（第２面５号溝）の存在が認められた。灰褐色砂質土、またその下層に淡灰褐色砂質土があり、その下層の暗灰褐色砂質土に遺構の掘り込みが確認された。この面が下層の遺構面（第２面）となるものと考えられ、この面まで掘下げて調査をすることとした。そ



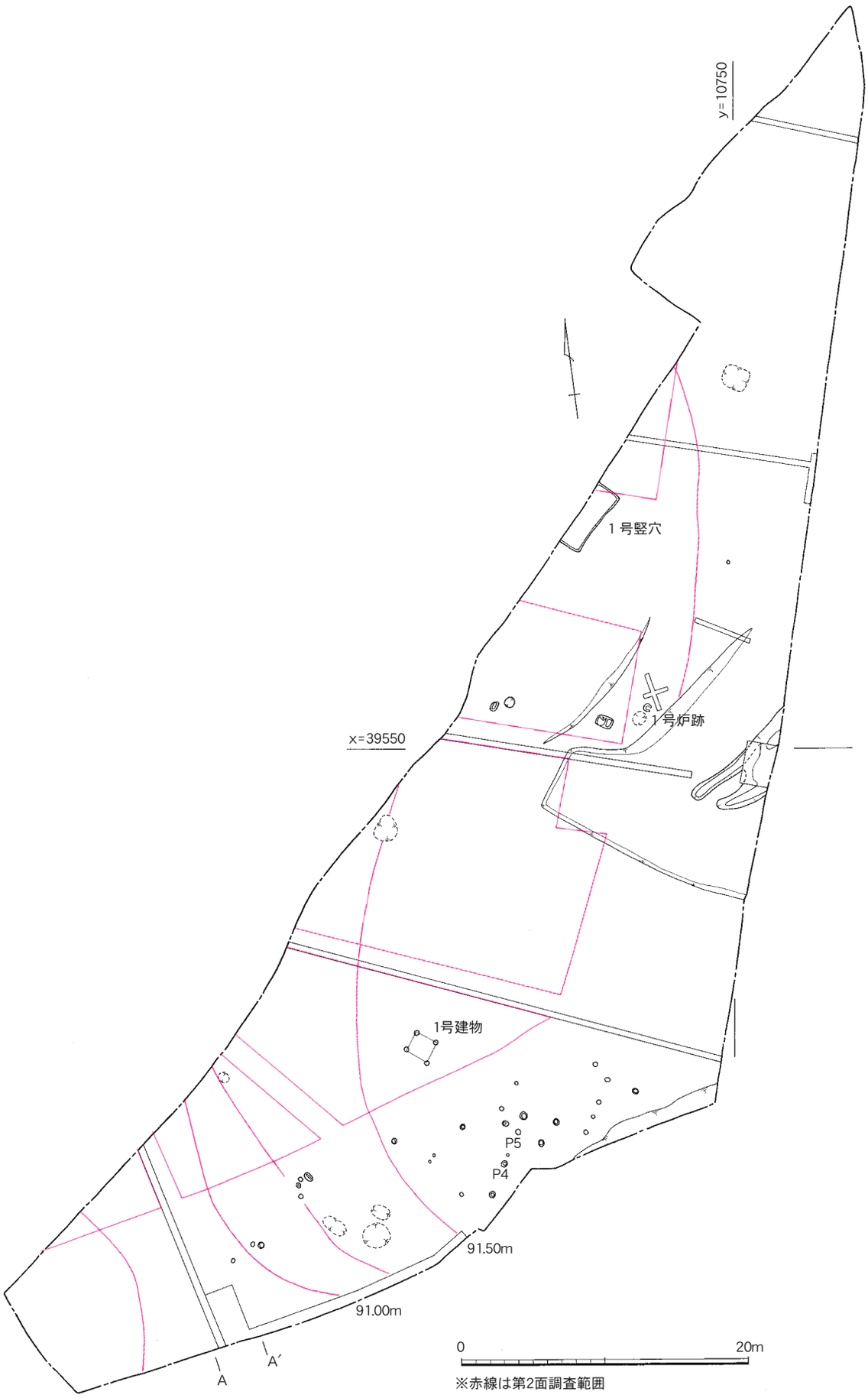
第７図　基本土層

1. 現耕作土(水田の壁)明橙褐色粘土(鉄分を含むため)
2. 灰褐色粘質土
3. 灰褐色砂質土､鉄分を含み橙色みをおびる
4. 灰褐色砂質土
5. 淡橙黄灰褐色砂質土(鉄分を含むため)
6. 灰褐色砂質土
7. 橙黄灰褐色砂質土(鉄分を含むため)
8. 灰褐色砂質土
9. 灰褐色砂質土. 鉄分ブロックを含む. ２～３cmの小レキを含む
10. 淡灰褐色砂質土
11. 橙黄灰褐色砂質土(鉄分を含むため)
12. 淡灰茶褐色砂質土
13. 淡灰茶褐色砂質土. ５cm～こぶし大のレキを多く含む
14. 明灰茶褐色砂質土. たまご大のレキを少し含む
15. 灰褐色砂質土
16. 明橙灰褐色砂質土(鉄分を含むため)
17. 灰褐色砂質土. 16の影響で､若干橙色みをおびる
18. 暗灰褐色砂質土
19. 灰色砂層
20. 橙褐色砂層(鉄分のため)
21. 灰色砂層
22. 黄灰色砂層
23. 黒色砂層. 黒サビのような
24. 赤橙褐色砂層
25. 灰色砂層
26. 灰色砂層. 荒砂

0　1m

第７図　基本土層図（1/40）

写真８　基本土層



第８図　第１面遺構配置図（1/400）

の際に、第２面まで掘削のおよぶ範囲は水路を作る箇所に限られることから、幅約 11m の水路範囲を中心に掘下げを行うこととし、機械を用いて第２面まで掘り下げを実施した。第２面にて検出された遺構は土坑１基、溝跡５条であった。また、この第１面と第２面との間に含まれる層には遺物の包含が認められ、第２面より下層には遺物の包含は認められず、砂質の土が堆積し、さらにその下層には礫層の広がりが認められた。おそらく、大肥川の旧河道の堆積層であると考えられる。また、一部流路状の堆積も認められたが、遺物の包含も見られなかったことから、これより下層への掘下げは行わず、土層確認に留めている。なお、水田層下部にて確認された遺構面を第１面、その下層にて確認された遺構面を第２面と呼ぶこととする。

(2) 基本層序（第７図）

調査区南西側壁面の土層堆積である。現況水田層（1、２層）の下層に３～５層、6，７層の水田層を挟み８～ 11 層と水田層が堆積していることが確認された。特に 8、10 層が水田層であり､9､11 層に重なるように形成されていた。この２層の水田層は水田の作り変えの可能性があり、この重なり合う付近が水田境であった可能性が考えられる。また、この９層の東側にはピット状の落ち込みがあり、これがあるいは水田用水路であった可能性も考えられる。この９～ 12 層の水田層には中世の白磁碗などの遺物が含まれていたことから、中世以降にこの一帯に水田開発が及んだ可能性が考えられる。さらにその下層には 12、13、14 層の堆積が見られ、これらは砂性の高いことから大肥川の氾濫に伴う遺物包含層であると考えられるものの、拳大の礫などが多く含まれることから、氾濫に伴うと断言することが出来ず、あるいは水田構築時の盛り土の可能性も考えられる。15 層上面に遺構の掘り込みが認められ、この面を第１面として遺構の検出を行っている。また､第１面下層には 15､16 層が堆積しこれらには主に弥生から古代の遺物の包含が認められた。この層も主に砂質が高いことから、河川氾濫に伴う堆積と考えられる。17 層上面には遺構の掘り込みが認められ、この面を第２面として遺構の検出を行っている。17 層以降は遺物の包含が認められないものの、上層と同様に砂質が非常につよく、また、19 層以下には互層のように堆積し、最下層には礫層が見られることなどから、大肥川の氾濫により堆積したものと考えられる。

(3) 第１面の遺構と遺物（第８図、図版 1）

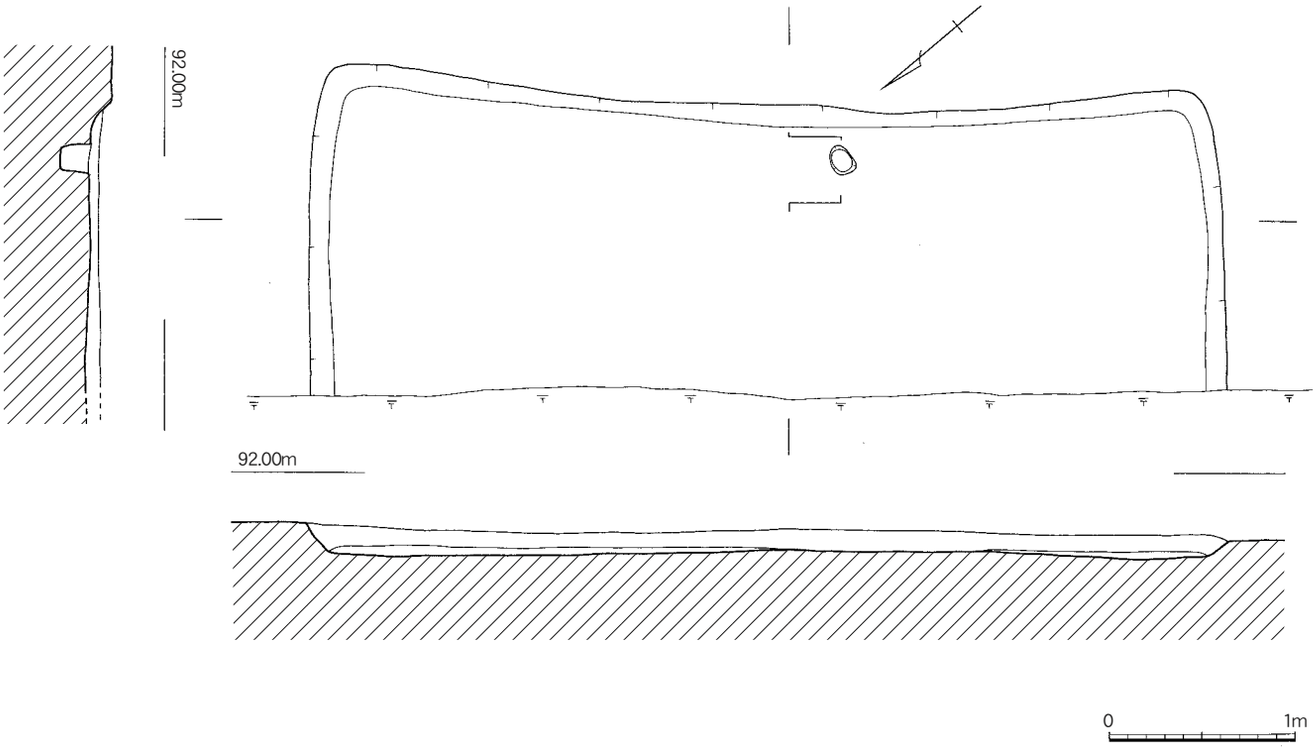
先述した第１面の遺構面より検出された各遺構とそれより出土した遺物について以下に説明を加える。

１号竪穴状遺構（第９図）

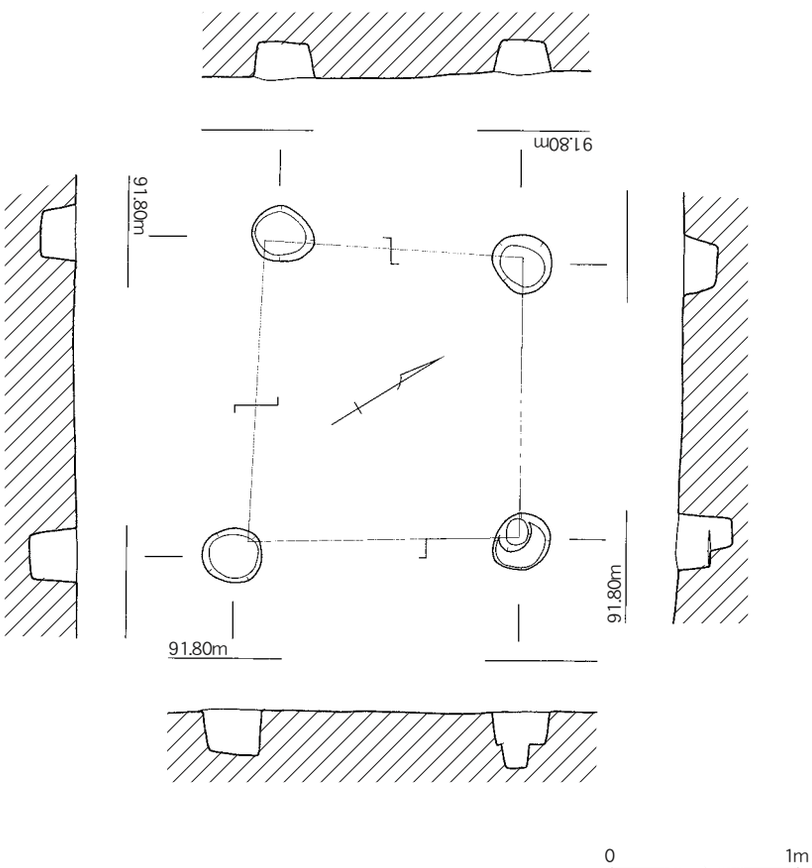
調査区中央寄りにて検出され、西半を大きく削平されている。確認面での規模は東西長軸で約 4.9 m、床面までの深さ約 15cm を測る長方形プランを呈している。壁面の立ち上がりも垂直で床面も平坦に仕上げられている。

出土遺物（第 12 図、図版 10）

１は土師器坏の高台である。断面逆台形状を呈する。２は土師器坏の底部である。高台はやや外側に開く。



第９図　１号竪穴遺構実測図（1/40）



第 10 図　１号掘立柱建物実測図（1/40）

1 号掘立柱建物（第 10 図、図版 3）

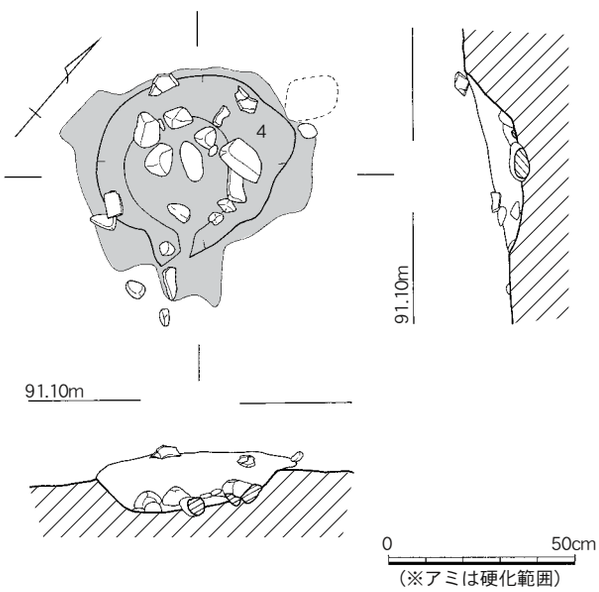
調査区南側にて確認された北西から南東方向に軸を取る 1 間× 1 間の建物である。やや柱穴の位置がずれているものの、この 4 つの柱穴のみが掘り込まれていたことから建物として報告する。柱穴間の距離は約 1.3 m を測る。検出面での柱穴の掘方は約 30cm の円形を呈し、深さは深いもので約 30cm を測る。

遺物の出土は見られなかったが、遺構埋土は周辺の柱穴埋土と類似する暗褐色土を呈し周辺の柱穴より白磁などが出土していることから、ほぼ同時期の可能性が考えられる。

1 号炉跡（第 11 図、図版 3）

調査区中央にて確認された遺構で、やや凹む掘方とその周辺が被熱により硬化していたことから、カマドや鍛冶遺構の可能性も考慮して調査したが、周辺にプランの広がりが見られず、また出土遺物にも鉄滓等の出土が見られなかったことから、炉跡として報告する。

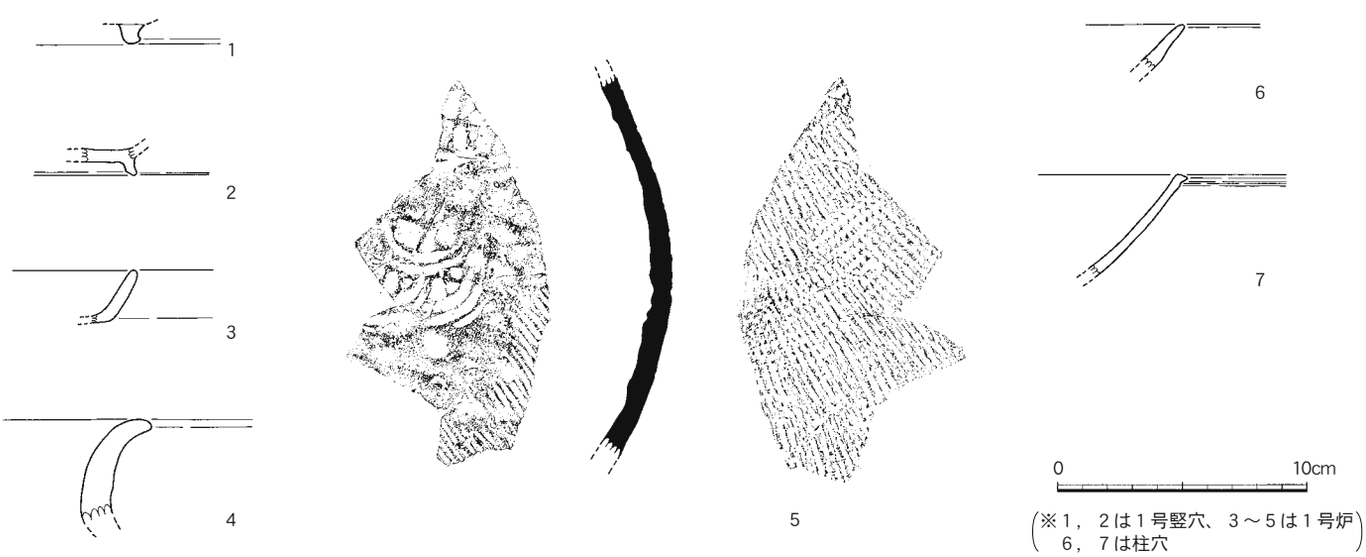
検出面での規模は径約 50cm、深さ約 20cm を測り、掘り込み面の外にも被熱による硬化面が確認された。また、底には石が崩落しており、これらの石も熱を受けていた。



第 11 図　1 号炉跡遺構実測図（1/20）

出土遺物（第 12 図、図版 10）

3 は炉跡の周辺より出土した土師器皿である。口縁部が緩やかに立ち上がる。4 は炉埋土より出土した土師器甕である。口縁部が緩やかに外へと開きながら立ち上がる。5 は須恵器甕の胴部である。外面は格子目タタキ、内面には青海波状タタキが残る。



第 12 図　第 1 面遺構出土遺物実測図（1/3）

柱穴

調査区南西に多く認められた。建物等は１号掘立柱建物以外には認められなかった。

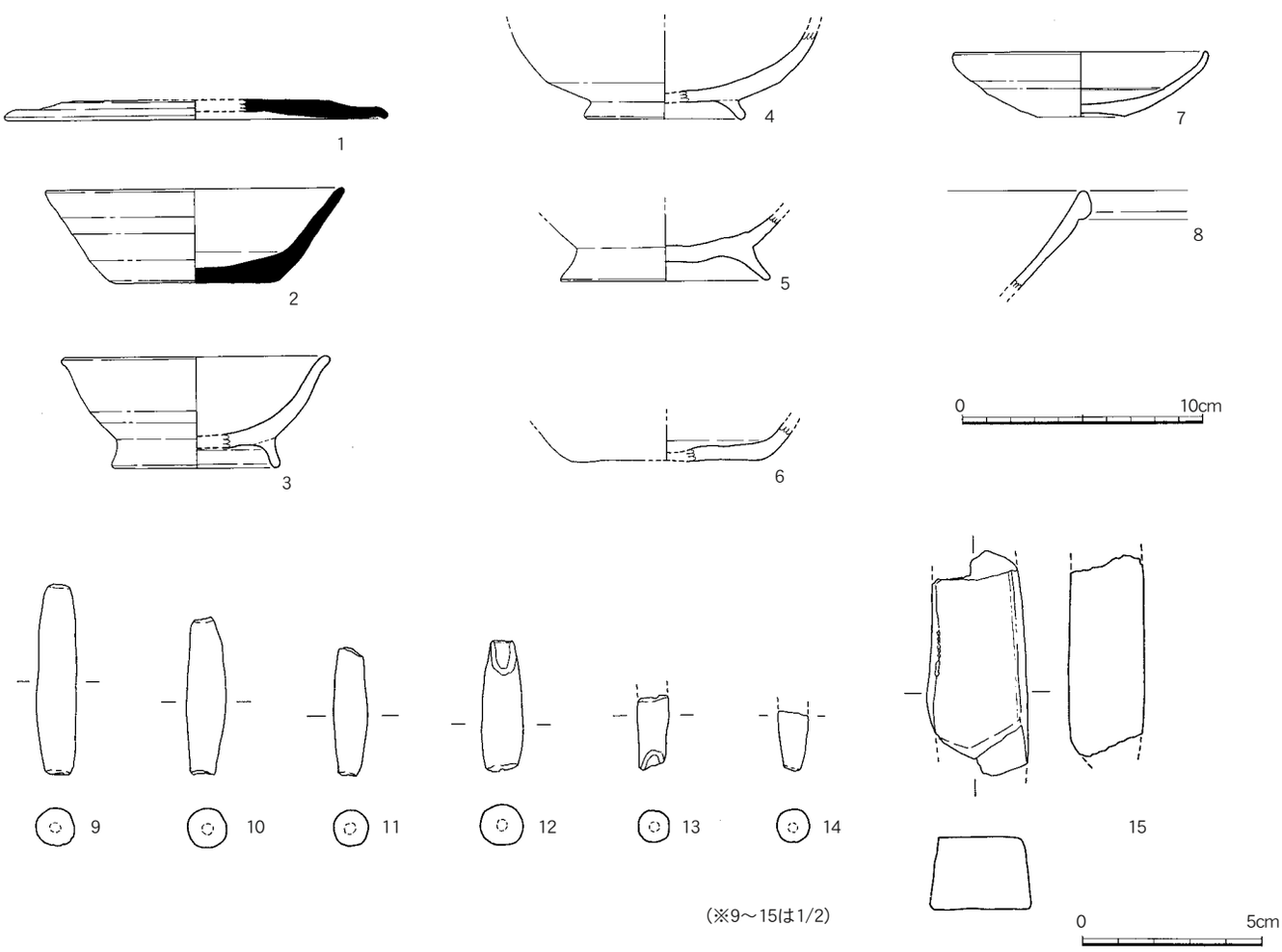
出土遺物（第 12 図、図版 10）

６は P5 より出土した土師器椀である。口縁部がやや外に開く。７は P4 より出土した白磁碗である。口縁部をやや外に肥厚させる。全体に白釉が施される。

第１面水田層、遺物包含層出土遺物（第 13 図、図版 10）

水田層およびその下面の遺物堆積包含層（第７図 12 ～ 14 層）より出土した遺物である。８が水田層（第７図９層）より出土した。

１は須恵器坏蓋である。口縁部端部がやや丸みをもつ。２は須恵器坏身である。口縁部がやや外に開く。３は土師器坏である。高台を持ち、口縁部は丸みを持ちながら立ち上がり端部をやや外反させる。底面はやや丸みを持ち、高台は長くやや外に開く。４は土師器坏である。口縁部にかけて丸みを持ちながら立ち上がる。高台はやや小さく、外に開く。５は土師器坏である。高台は長く外に開く。６は土師器坏である。底部は平坦に仕上げられ胴部にかけて明瞭に屈曲する。７は白磁の小碗である。口縁部は緩やかに外に開き、端部を上方に摘み上げる。内面には沈線が巡り、底部はやや上げ底状を呈する。胴部下半より白釉が施され、底部には釉がかけられていない。８は白磁碗である。口縁部端部をやや肥厚させる。９～ 14 は土錘である。長さはマチマチであるが、孔はいずれも２～ 3mm 程度で、径は１～ 1.1cm 程度を測る。15 は方柱状片刃石斧か。基部、刃部とも欠損しており、左上面稜部に使用に伴う欠損が見られる。



第 13 図　第１面上層水田層・遺物包含層出土遺物実測図（1/2、1/3）

(4) 第 2 面の遺構と遺物（第 14 図）

前節にて記載した第 2 面にて検出された遺構と遺物について説明する。なお、第 2 面までの掘下げを行った際に調査区中央部ほど上層の水田層や遺物包含層の堆積状況が異なっていた。以下に説明する。

調査区土層①（第 15 図、図版 3）

調査区南側の東壁土層である。1、2 層は現況水田基盤土で、その下面には 3、4 層に水田層が堆積している。これら調査区東壁にて共通して見られる水田層である。その下面には 5、11、12、13 層が堆積しており、これらは大肥川の砂質が高く大肥川の氾濫による堆積層と考えられる。これは基本土層の第 1 面上層の遺物堆積層に該当するものと考えられる。ただ、やや北側には層位の乱れが確認され、あるいは水田を構築する際の盛り土などが行われた可能性が考えられる。基本土層にて確認された現況基盤土下部に堆積する 3 枚の水田層は確認されず、1 枚の水田層のみが堆積しているのである。ややレベルが異なるものの、この水田層は基本土層の最上層の水田と類似している。14 層上面が第 1 面の遺構検出面である。その下層には 14、15 層が堆積しており、これらは第 2 面上層の遺物堆積層である。22 層上面が第 2 面の遺構検出面である。その下面には 21 や 23、24 層などの砂質の強い堆積層が確認され、これらが大肥川の旧堆積層の可能性が考えられる。

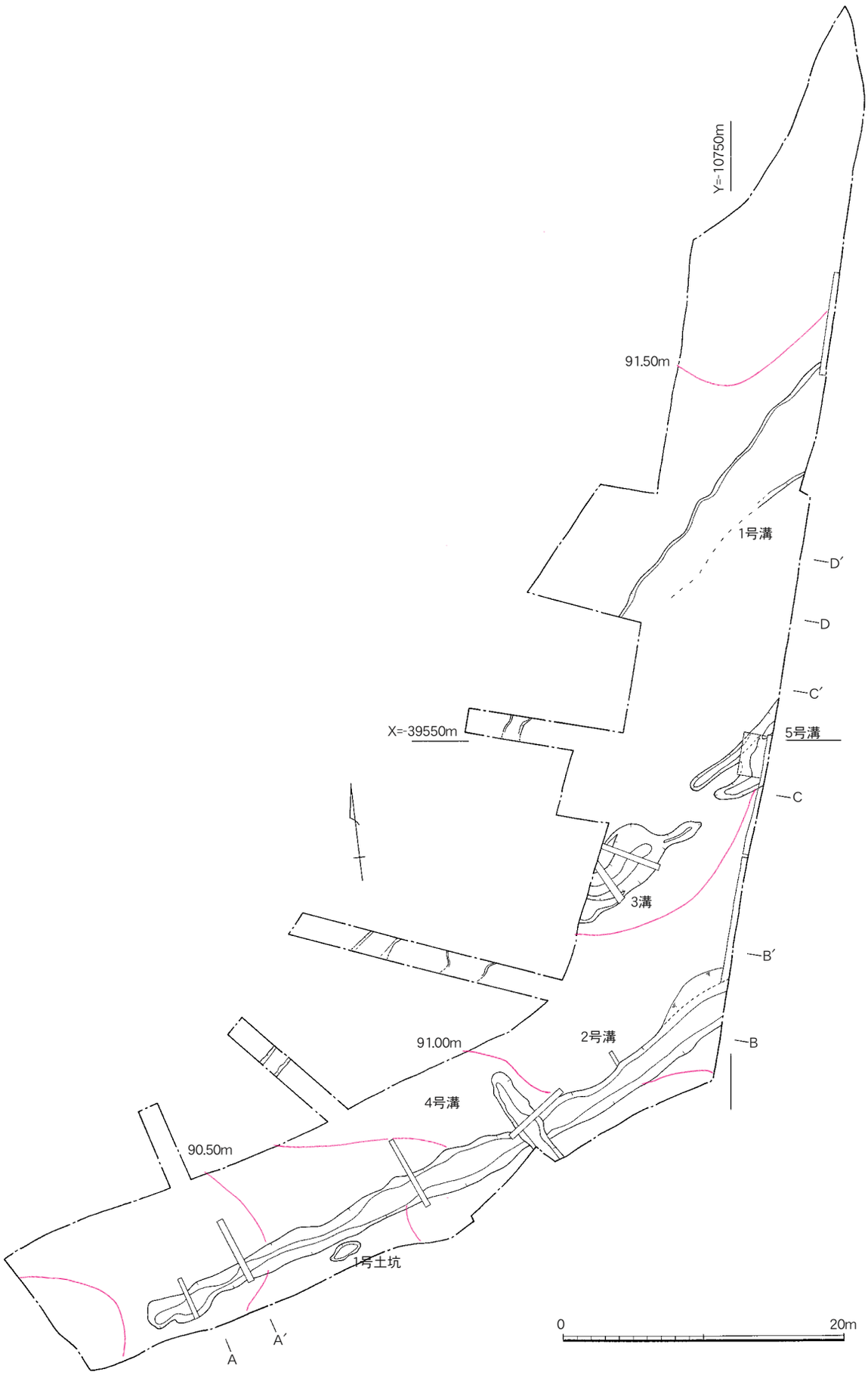
調査区土層②（第 15 図、図版 4）

調査区中央付近の東壁土層である。1 ～ 2 層は現状水田基盤土であり、3、4 層がその前の水田基盤土である。その下層の 5 層上面が第 1 面の遺構検出面となる。5 ～ 7 層は遺物堆積層と考えられ、その下面の 16 層および、19 層が第 2 面の遺構検出面である。この付近での第 2 面は複雑に入り組んでおり、これらも旧河道の堆積土層と考えられる。この面を掘り込むように流路の存在が認められ、8 層から 12 層は 5 号溝の堆積埋土である。その下層には 18 層から 22 層は水平状に堆積しており、そのほとんどが砂質土であることから、大肥川の旧堆積層の可能性が考えられる。

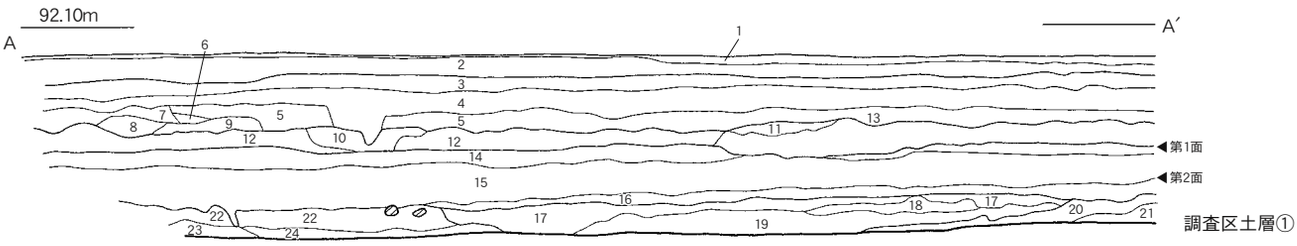
調査区土層③（第 15 図、図版 4）

調査区北側の東壁土層である。1 層は現況水田基盤土であり、2 ～ 4 層に水田層が確認された。これは調査区南側にて現況基盤土下部に確認された水田層である。この水田層直下の 5 層上面が第 1 面の遺構検出面となっている。5，6 層は第 2 面上面に堆積する遺物包含層で、これは調査区南側とは厚さが異なるものの同様の堆積状況を示す。この下面にある 7、8 層上面が第 2 面の遺構検出面となるが、これは北側に行くと一旦上がり、さらに先へとやや下っていた。また、9 層の下面には大きな石が堆積する礫層（10 層）が広がっていることから、10 層は旧大肥川の河底であり、7 ～ 9 層はその堆積層であった可能性が考えられる。

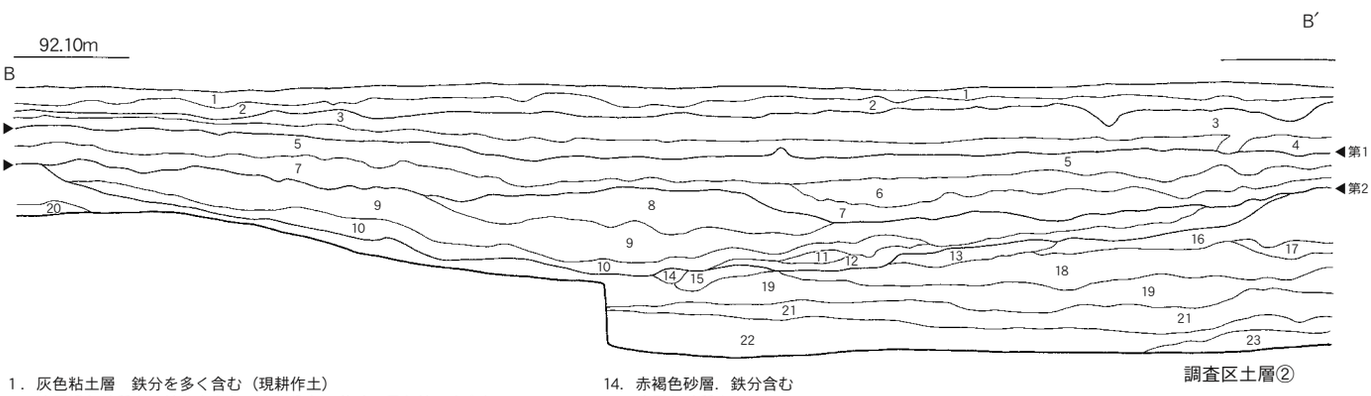
以上の土層観察から、調査区内は本来大肥川の本流あるいは支流が流れており、その氾濫堆積により形成された可能性が高い。それはちょうど調査区土層③にて確認された礫層が南側に向かって大きく下っていることから、この付近が河川の端にあたっていた可能性が考えられる。ただ、その時期は少なくとも第 2 面にて確認される時期以前であり、遺物の包含も認められないことから、弥生時代以前と考えられる。また、調査区南西側に向かって調査区内では傾斜しており、この傾斜部付近では中世以降の水田層の存在が確認されるが、調査区中央部付近ではこの水田層の存在が認められないことから、少なくとも中世以降の時期に傾斜部が埋没あるいは、盛土により平坦化し水



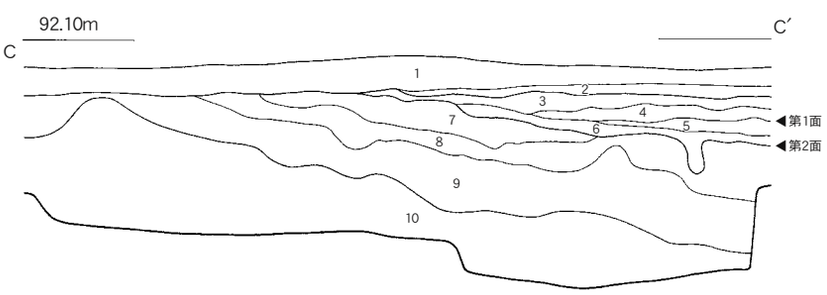
第 14 図　第 2 面遺構配置図（1/400）



1．現耕作面（水田の盤）灰色粘土層．鉄分ブロックを含む
2．灰褐色砂質土．荒砂．小石を多く含む
3．淡灰褐色砂質土
4．淡灰褐色砂質土．鉄分を含み橙色を帯びる
5．淡灰褐色砂質土
6．５と似ているが、少し褐色が濃い
7．明灰褐色砂質土
8．暗灰褐色砂質土
9．淡灰茶褐色砂質土
10. 灰茶褐色砂層．砂粒がやや荒め
11. ５と似ているが若干黒っぽい（砂質土）
12. 灰茶褐色砂層．10よりも黒みが強い．砂粒が荒め
13. 暗灰褐色砂層．８よりも黒みが強い．砂粒は荒め．
大粒の砂ブロックを含む
14. 灰褐色砂質土．灰色味が強い
15. 淡灰褐色砂質土．鉄分を含み、淡橙色をおびる
16. 淡灰褐色砂質土．鉄分を含み、橙色味がつよい．15より砂粒がやや荒め
17. 淡灰褐色砂質土．鉄分ブロックを含む、灰色味がつよい
18. 淡灰褐色砂層．鉄分を含み橙色をおびている
19. 淡灰褐色砂層土．鉄分をあまり含まない
20. 灰褐色砂質土
21. 淡灰茶褐色砂質土
22. 灰色砂質土
23. 淡灰褐色砂質土
24. 淡灰茶褐色砂質土．23より若干灰色が濃い



1．灰色粘土層　鉄分を多く含む（現耕作土）
2．淡灰褐色砂質土．鉄分を含む、やや橙色　荒砂・黒色粒子を含む
3．淡灰褐色砂質土
4．橙灰褐色砂質土
5．灰褐色砂質土
6．灰褐色砂質土．鉄分を含む
7．淡灰褐色砂質土．鉄分を含む
8．淡灰褐色砂質土
9．淡灰褐色砂質土．鉄分ブロックを含む　８よりも灰色が強い
10. 淡灰褐色砂質土．しまりあり
11. 灰褐色砂質土．しまりなし
12. 灰色粘質土．10より若干灰色が薄い
13. 赤灰褐色砂層．鉄分含む
14. 赤褐色砂層．鉄分含む
15. 淡灰色砂質土
16. 淡灰褐色砂層
17. 橙灰褐色砂質土
18. 淡灰褐色砂質土
19. 赤橙褐色砂層
20. 淡灰茶褐色砂質土
21. 淡灰褐色砂質土．鉄分ブロック含む
22. 灰色砂質土．やや粘性あり
23. 灰色砂層



1．現耕作土（水田の盤）灰色粘土層．鉄分ブロックを多く含む
2．淡黄灰色砂質土．荒砂を少し含む．上面付近は鉄分を含む
3．淡黄灰褐色砂質土．砂粒を少し含む．鉄分を含む
4．淡黄褐色砂質土
5．灰褐色砂質土．やや黄色みをおびる
6．灰褐色砂質土．黒褐色ブロックを含む．7より若干しまっている
7．灰褐色砂質土
8．淡灰褐色砂質土
9．灰褐色砂質土
10. 礫層．1mm大の石からたまご大の石まで各種含む

0　1m

第 15 図　土層実測図実測図（1/40）

田として利用された可能性が考えられる。

溝

5 条の溝が検出された。これらはいづれも流路の可能性があり、調査時には 1 号溝のみが溝と仮称し、2 号溝は 1 号流路、2 号溝が 1 号流路、3 号溝が 2 号流路、4 号溝が 3 号流路、5 号溝が 4 号流路と仮称されていたが、本報告において全て溝として統一して報告することとする。

1 号溝（第 16 図、図版 4 ～ 7）

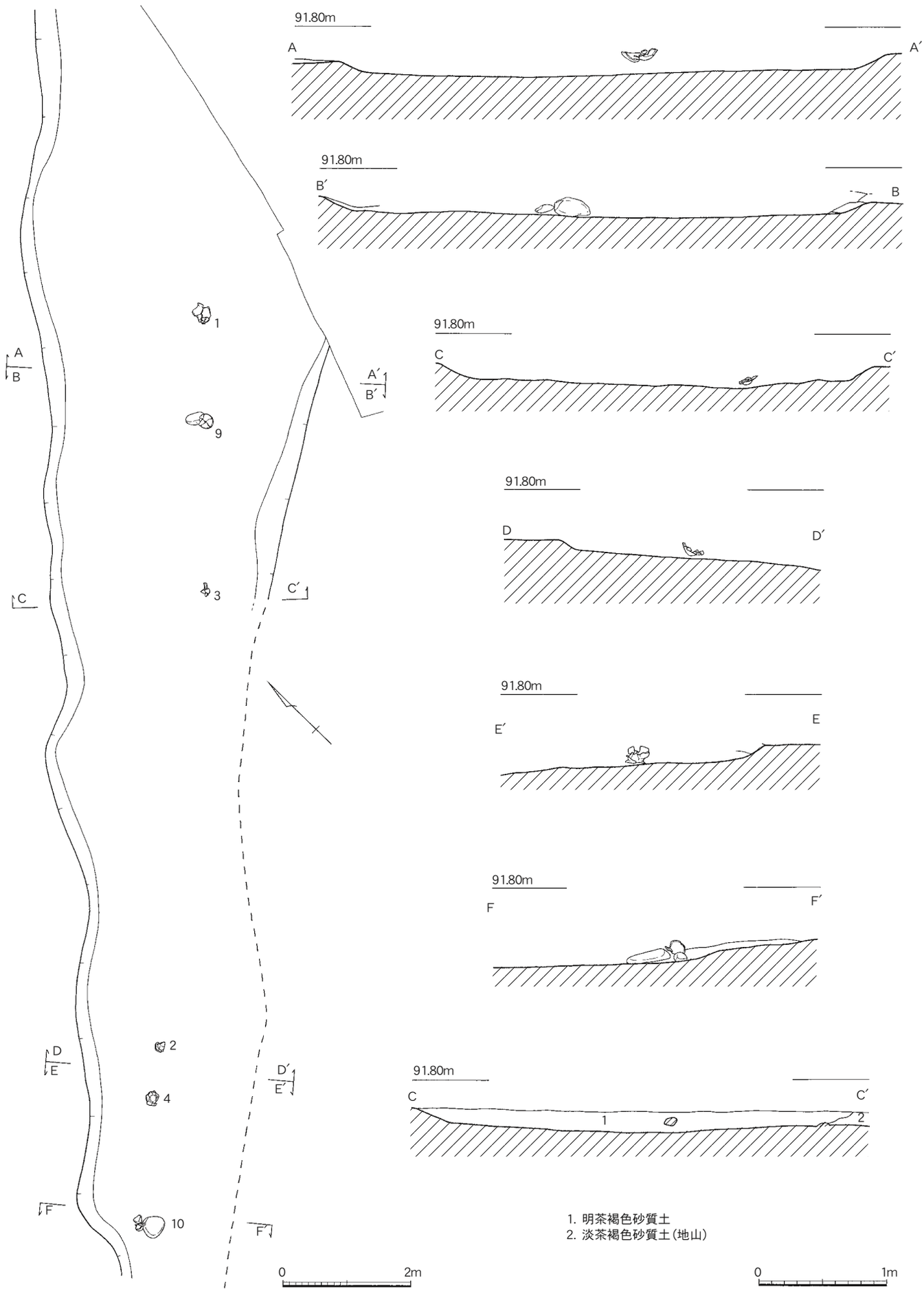
調査区を北東から南西へと流れる溝である。南側は削平を受けており、浅くなっている。調査区外の確認用トレンチに溝らしき落ち込みが続いており、これが 1 号溝の可能性も考えられる。ただし、この溝の埋土は地山と大きく異ならない明茶褐色砂質土であることから、流路の可能性が高く、蛇行している可能性も考えられるため、ここでは調査区内にて明確に検出された区間について説明する。調査区内での長さ約 22 m、検出面での幅は大きなところで 4.6m、北側での深さは 15cm、南側では 10cm を測り、南側は下層検出時に誤って掘下げており、立ち上がり部分を確認することが出来ていない。断面形は浅いレンズ状を呈しており、北側では砂質礫層が地山であるため、底に礫が多くみられた。立ち上りも明瞭ではなく、浅い上に埋土もほぼ砂質土の同一層であることから、大肥川から流れる流路であったものと考えられる。

この溝の中央部からほぼ完形の状態で遺物の出土が見られ、それらの土器はある程度の距離をおいて並べられていた。器種は甕が 4 点と皿、壺であり、いずれも明らかにその場所に置かれたような状態であったことから、何らかの祭祀行為に伴うものと考えられる。

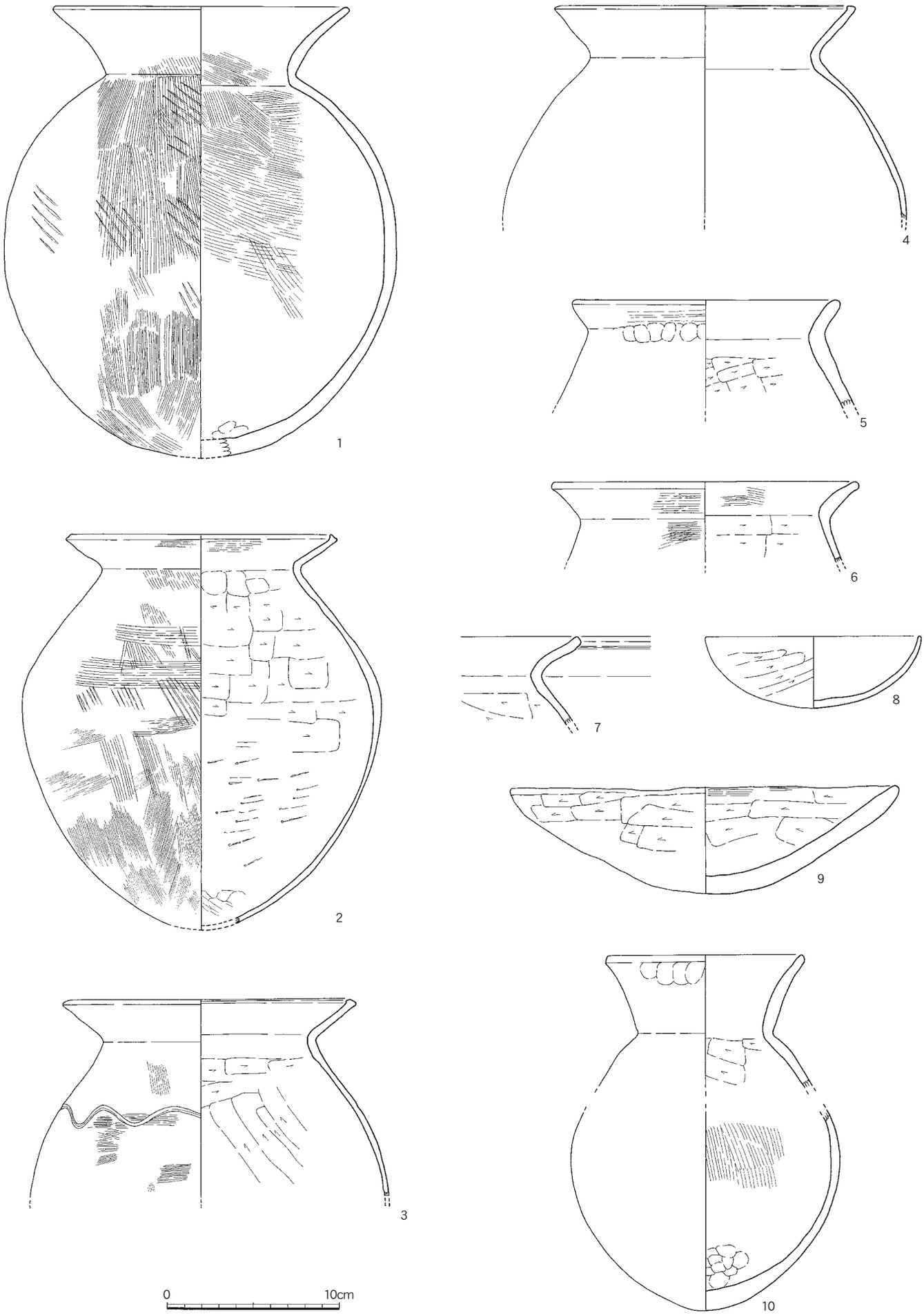
出土遺物（第 17、18 図、図版 11）

1 ～ 4、9、10 が溝に埋置された状態で出土している。

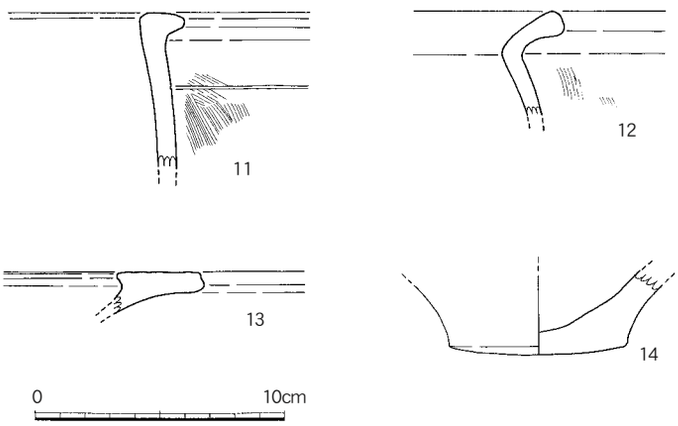
1 は土師器甕である。胴部は全体に丸みを帯び、外に張り出す。底部は丸底気味で、内面には指頭圧痕が残存する。胴部上半には斜め方法のタタキ成形の痕跡が残存しており、その後に縦方向のハケ目が施される。内面には横方向のハケ目が施される。頸部はしまり口縁部は長く、緩やかに湾曲しながら外に開く。胎土には金雲母が含まれる。2 は土師器甕である。全体に薄い作りである。胴部は外に張り出し底部に向かってやや尖底気味の丸底を呈する。底部内面には指頭圧痕が残り、胴部外面下半は縦方向のハケ目が施され、上半は斜め上方の目の細いタタキが施され、その後に横方向のハケ目が施される。内面は横方向の削りにて仕上げられ、底面ほどナデ消されているため単位が明瞭ではなく、砂粒の動きのみが確認された。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部はやや内側に湾曲しながら外に開き、端部を上方にツマミ上げる。口縁部には横方向のハケ目が残る。胎土には金雲母が含まれる。3 は土師器甕である。全体に薄い作りで、胴部は外に張り出し、胴部上半には横ハケの後に一条の波状沈線文が巡る。内面は頸部付近が横方向の削りで、胴部下半部は斜め方向の削りである。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は外側に開き、端部を上方にツマミ上げる。胎土には金雲母が含まれる。4 は土師器甕である。胴部は丸みを帯びて外に張り出し、頸部は明瞭に屈曲し口縁部は内湾しながら外に開き、口縁端部をツマミ上げる。5 は土師器甕である。厚みがあり、口縁部は小さく外に開く。頸部には指頭圧痕が残り、口縁部は横方向のハケ目が施される。内面には横方向のケズリが施される。6 は土師器甕である。口縁部はやや厚みがある。外面には横方向のハケ目が残り、頸部内面は削りにて作出され、口縁部内面には横方向のハケ目が残る。7 は土師器甕であ



第 16 図　1 号溝実測図（1/40、1/80）



第 17 図　1 号溝出土遺物実測図①（1/3）



第 18 図　1 号溝出土遺物実測図②（1/3）

る。口縁部は内湾しながら外に開き、端部付近に一条の沈線文が巡る。頸部内面はケズリにて作出される。8 は土師器小型丸底椀である。外面はケズリ調整が残り、内面はナデ仕上げである。9 は土師器鉢である。全体に厚い作りで、底部は若干平底気味に作出され、口縁部は外に開く。全体に荒い作りで、外面にはケズリ調整が残り、内面にはケズリの後に口縁部端部に横方向のハケ目が施される。10 は土師器壺である。胴部は外に開き、底部にかけてやや尖底気味を呈する。底部内面には指頭圧痕が残り、内面には縦方向のハケ目が施される。頸部はケズリにて作出され、口縁部は外湾しながら小さく外に開く。口縁端部外面には指頭圧痕が残る。

11 ～ 14 は流れ込みの遺物と考えられる。11 は弥生土器甕である。口縁部は逆 L 字状口縁を呈し、口縁部下半には沈線文が巡る。12 は弥生土器甕である。跳ね上げ口縁である。13 は鋤先状口縁を呈する弥生土器壺である。14 は甕の底部で、レンズ状を呈する。

2 号溝（第 21 図、図版 7）

調査区を西から東へと流れる溝である。調査区内での長さ約 47 m、検出面での幅は大きなところで 2.7m、東側での深さは約 15cm、西側では 30cm を測る。断面形は浅いU字形を呈し、掘方が明瞭ではない。砂質の埋土が多く見られ、下層にはやや粘性の埋土が堆積していたことから、流路の可能性が考えられる。また、最上層には再度水が流れたことを示す浅い粘質層が堆積し、鉄分の沈殿が著しく認められた。この最後に流れた時には相当期間水が流れていたものと考えられる。

出土遺物（第 22 図、図版 12）

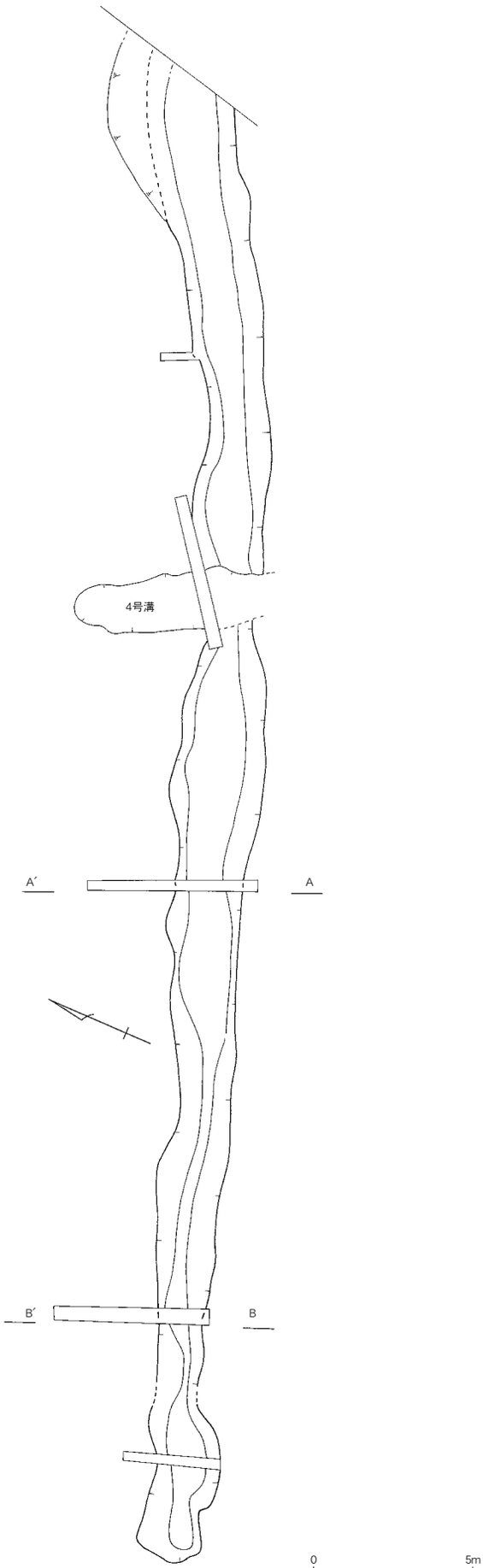
1 は土師器椀である。2 は土師器高坏の脚部である。内面には屈曲部が見られる 3 は土師器高坏の脚部である。

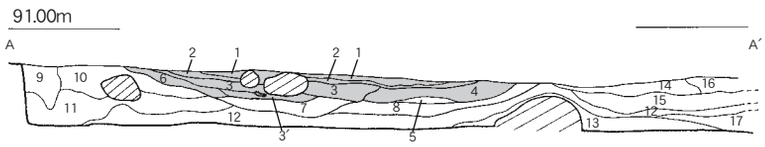
3 号溝（第 20 図、図版 8）

調査区中央部にて検出された溝で、軸方向が 5 号溝と同じであることから、同一の溝であった可能性が考えられる。ただ、東側で明瞭に立ち上り、また、埋土も砂質の土の堆積が数度にわたって見られ、形も不定形であることから、別の流路として報告する。調査区内での長さ約 11 m、検出面での幅は大きなところで 4.1m、東側での深さは約 40cm を測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。

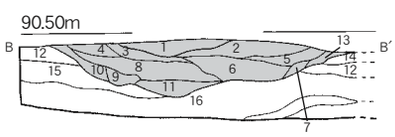
出土遺物（第 22 図、図版 12）

4 は土師器甕の口縁部である。小さく口縁部は外に開く。





1．暗灰黄褐色砂質土. 黄褐色ブロック混
2．暗灰褐色粘質土. 赤褐色粒子ブロック混
3．黄褐色砂質土. 3′　黄褐色砂ジャリ
4．淡灰黄褐色砂質土
5．暗黄褐色砂質土
6．暗灰褐色粘質土
7．灰褐色砂質土. 暗赤褐色(鉄分)粒子ブロック混
8．灰褐色砂質土. 暗赤褐色(鉄分)粒子ブロック多く混
9．淡黄褐色土. ややしまり有り
10. 淡灰褐色土.
11. 灰黄褐色土. 暗赤褐色(鉄分)粒子ブロック混
12. 暗灰色土. 暗赤褐色(鉄分)粒子ブロック混
13. 暗灰色土. 暗赤褐色(鉄分)粒子ブロック混なし
14. 暗灰褐色土
15. 明黄褐色土
16. 暗黄褐色土
17. 暗灰砂質土



1．暗灰褐色粘質土. 粒子ブロック多く混
2．淡黄褐色砂質土
3．黄褐色砂質土
4．２とほぼ同じ
5．淡明黄褐色砂質土
6．淡灰黄砂質土
7．暗灰黄砂質土
8．暗黄褐色砂質土. 淡灰黄褐色砂質土
9．明黄褐色砂質土ブロック
10. 淡灰褐色粘土
11. 暗黄褐色砂質土
12. 明橙砂質土
13. 10に類似
14. 明黄砂質土
15. 淡灰砂質土. 明橙色小ブロック混
16. 淡緑灰砂質土
17. 明赤褐色砂質土
18. 青灰粘土

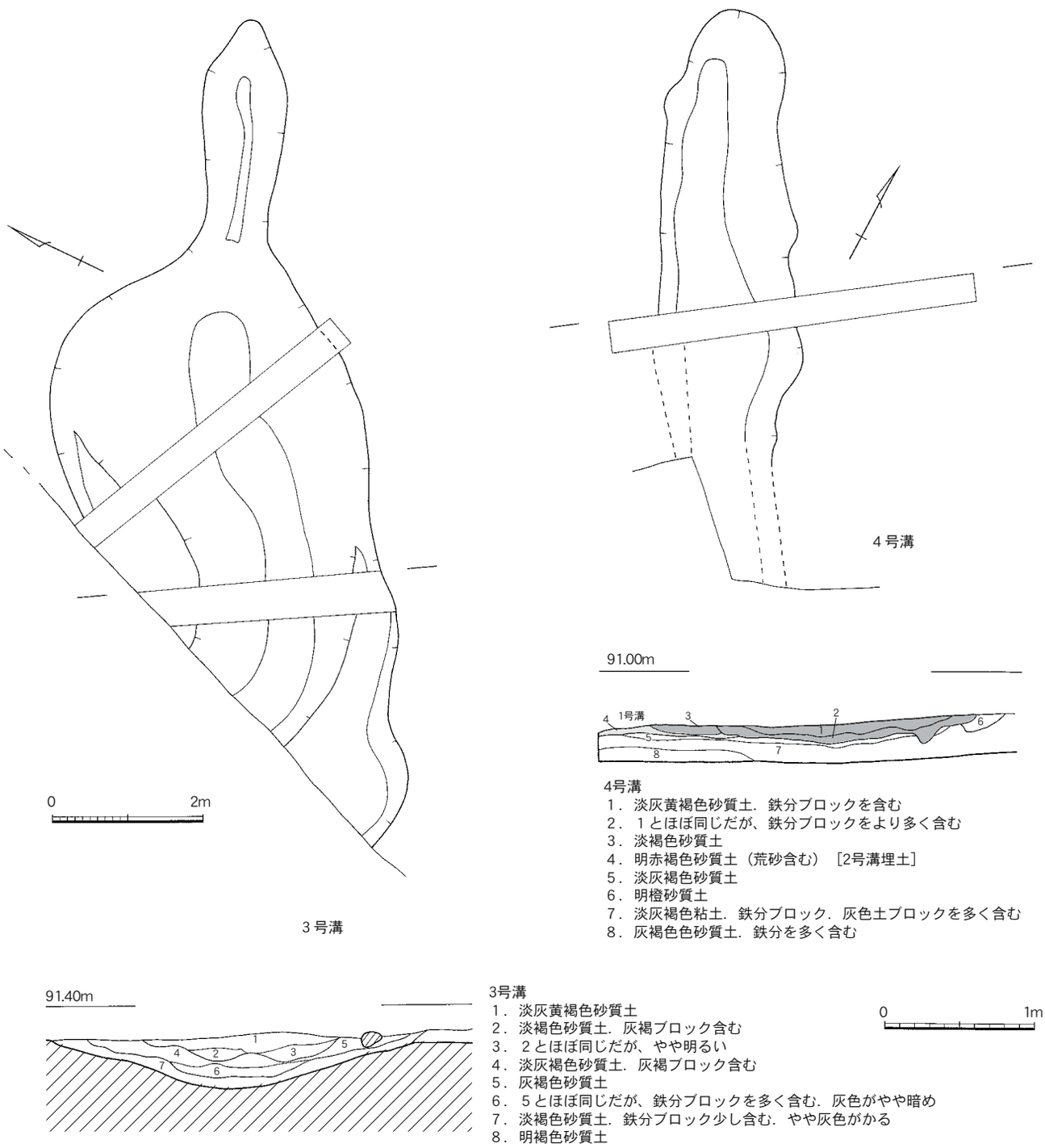
第 19 図　２号溝実測図（1/40、1/200）

4 号溝（第 20 図、図版 9）

調査区南側で検出された溝で、2 号溝を切っている。調査区内での長さ約 7.4 m、検出面での幅は大きなところで 2m、深さは約 10cm を測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土には砂質のが多く見られ、流路の可能性が高い。遺物の出土は見られなかった。

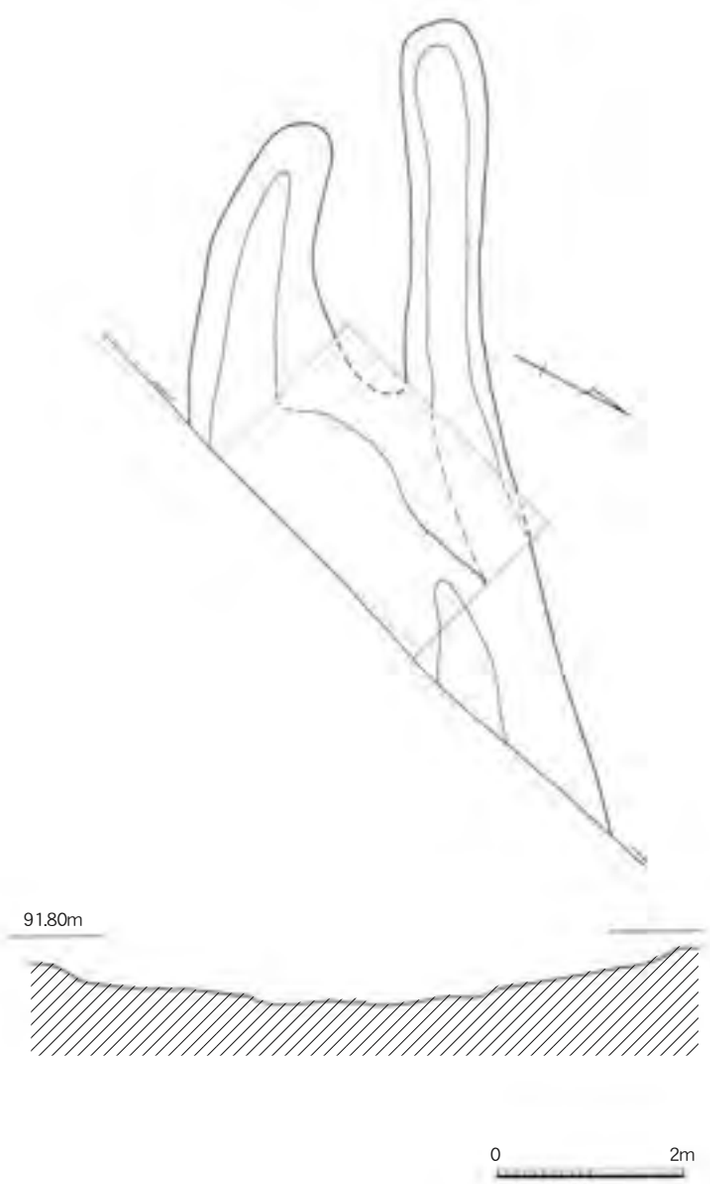
5 号溝（第 21 図）

調査区中央にて検出された溝で、軸方向が 5 号溝と同じであることから、同一の溝であった可能性が考えられる。ただ、東側に行くほど深くなっている。頭初第一面の一部を掘下げた際に確認

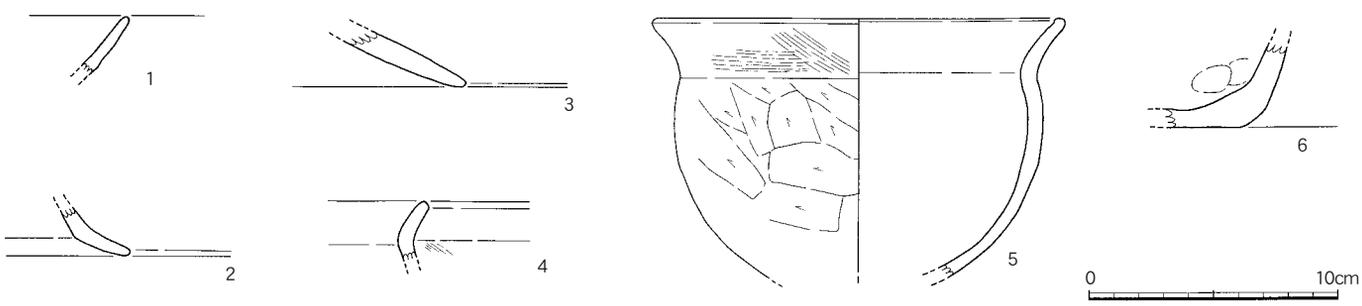


第 20 図　3、4 号溝実測図（1/40、1/80）

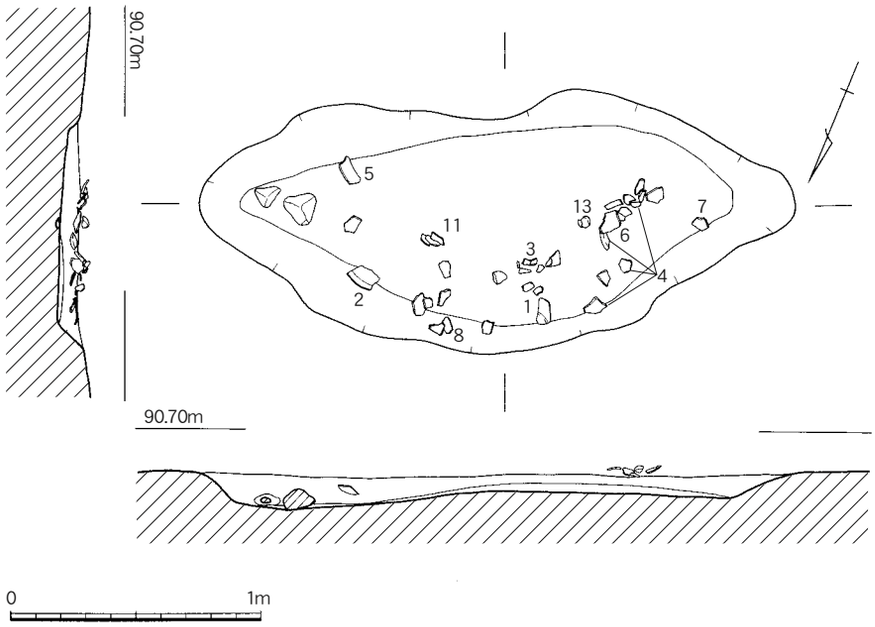
された溝で、さらに中央部は第１面の時点でトレンチ状に掘下げて確認を行った。調査区内での長さ約 8.6 m、検出面での幅は大きなところで 3.4m、深さは約 20cm を測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は砂質の土が見られることから、流路の可能性が高い。



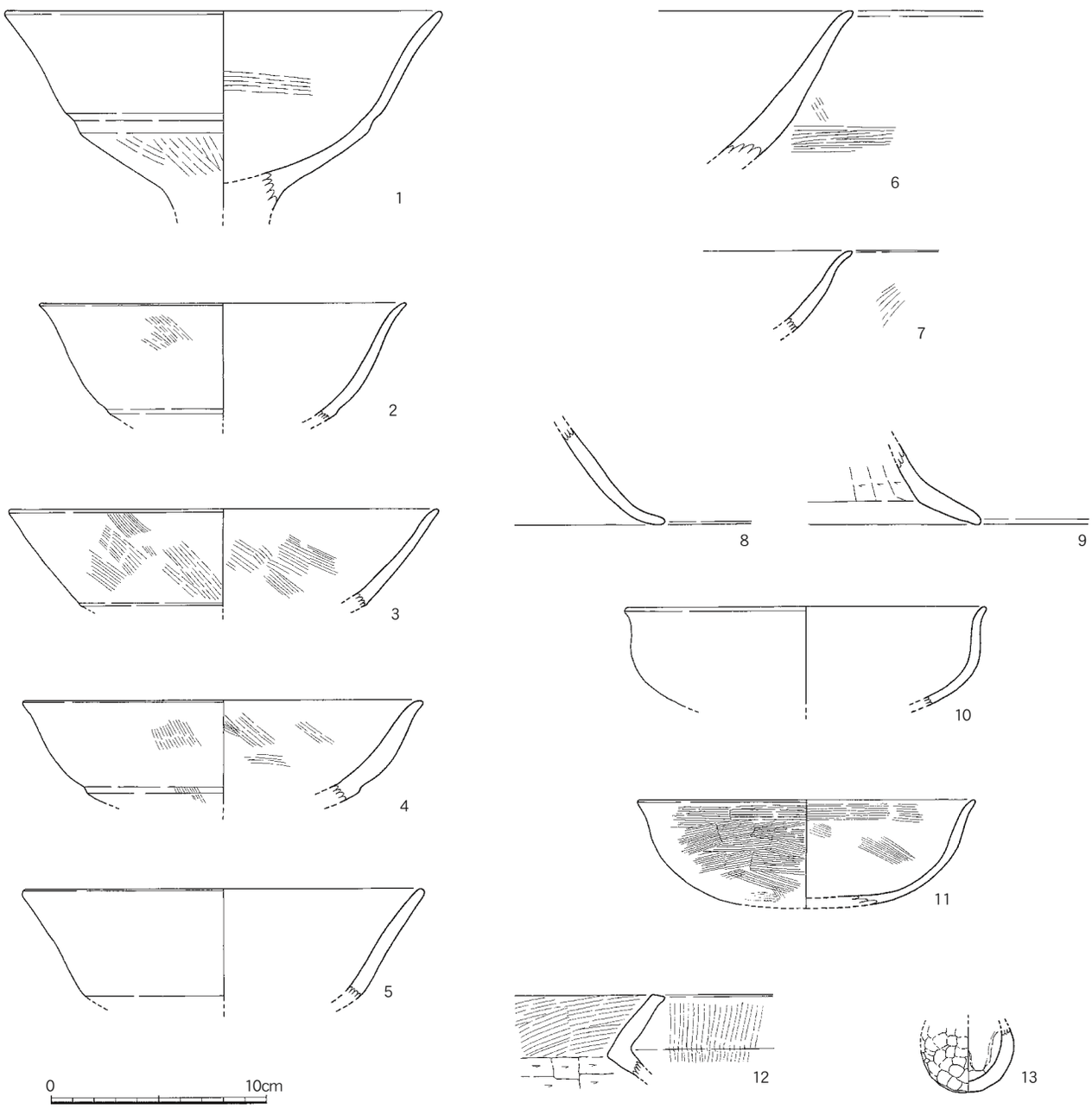
第 21 図　５号溝実測図（1/80）



第 22 図　２～５号溝出土遺物実測図（1/3）



第 23 図　1 号土坑実測図（1/30）



第 24 図　1 号土坑出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第 22 図、図版 12）

5 は土師器鉢である。丸底気味を呈し、外面にはケズリが施される。口縁部はやや外に開き、端部は若干ツマミ上げる。6 は土師器甕の底部か。やや平底気味を呈し、内面には指頭圧痕が残る。

1 号土坑（第 23 図、図版 9）

調査区西側にて検出され、2 号溝のすぐ側に位置している。確認面での規模は東西幅約 2.4m、南北幅約 1.1m、深さ約 15cm を測る不整形を呈する。底面は比較的平坦で立ち上がりはやや斜めである。埋土中からは多くの土器の出土が見られた。軸方向が 2 号溝と同一であることから 2 号溝に伴う土坑である可能性が考えられ、土器には高坏が多く見られ、ミニチュア土器も出土したことから、何らかの祭祀土坑の可能性が考えられる。

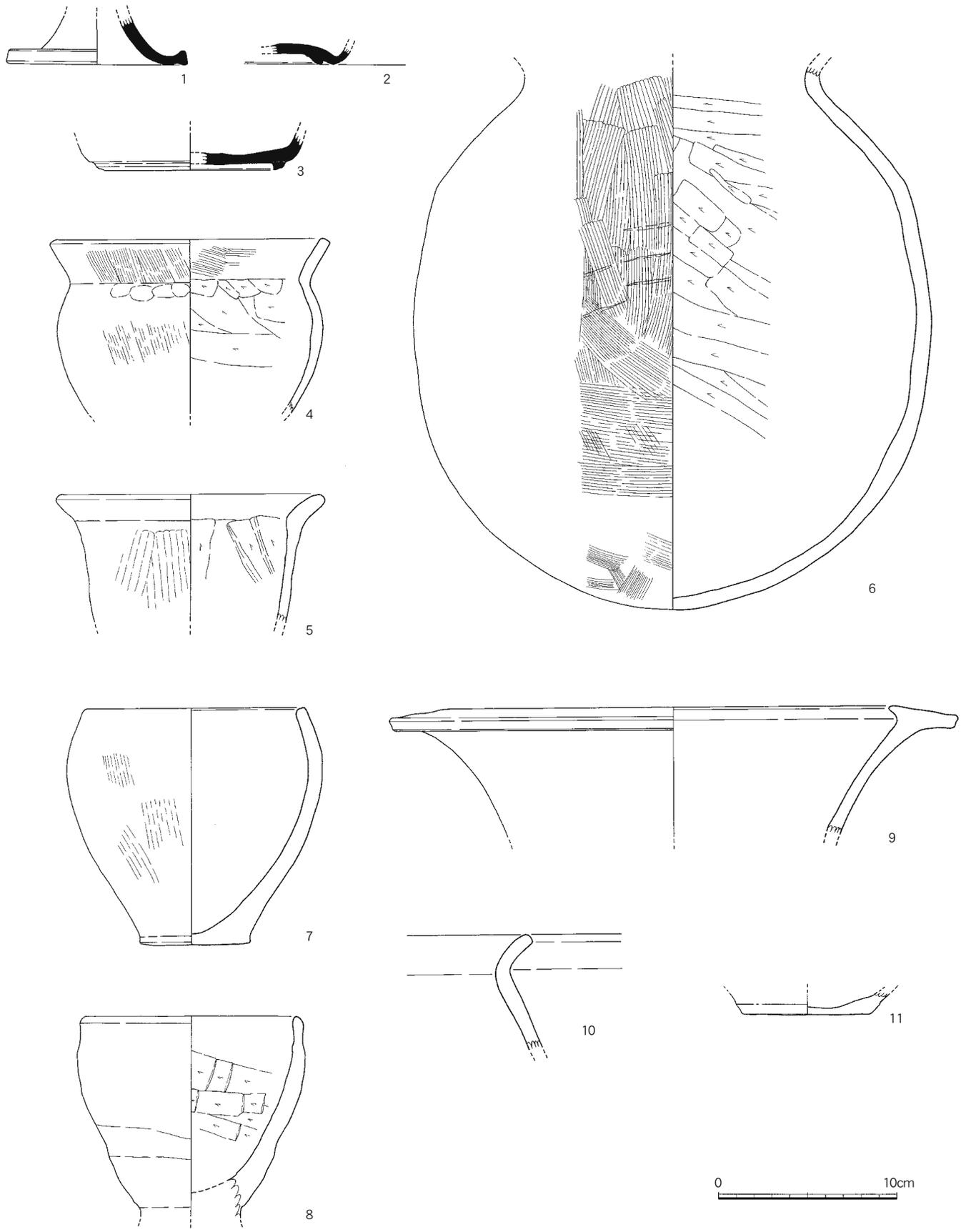
出土遺物（第 24 図、図版 12）

1～9 は土師器高坏である。1 は明瞭な段を持ちやや直立気味に立ち上り、口縁部がやや外湾する。坏部接合部付近にはハケ目が残り、内面には横方向のハケが残る。2 は明瞭な段を持ちやや直立気味に立ち上り、口縁部が外湾する。口縁部外面にはハケが施される。3 は明瞭な段を持ちやや直立気味に立ち上り、口縁部が外湾する。内外ともに斜め方向のハケ目が施される。4 はやや厚い作りで、明瞭な段を持ち、口縁部が外湾する。内外ともにハケ目が施される。5 はやや全体に外湾しながら外に開き、立ち上がりは緩やかな稜を持つ。6 は厚い作りで口縁部は外湾する。7 は口縁部端部が小さく外湾する。8 は脚部で端部を外に折り曲げる。9 は脚部で内面に段を持ち外に開く。内面はケズリが施される。10 は土師器椀である。緩やかに屈曲して垂直気味に立ち上がり口縁部は外湾する。11 は土師器椀か。緩やかに内湾しながら外に開き、端部を外湾させる。内外ともに横方向のハケ目が施され、内面はその後ナデ消されている。12 は土師器甕である。口縁部は明瞭に屈曲し、外に開き、端部が平坦に仕上げられる。頸部はケズリにて作出され、口縁部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケ目が施される。13 は手捏ねのミニチュア土器である。内外ともに指頭圧痕が残り、丸底を呈する。口縁部は欠損していた。

第 2 面遺物包含層出土遺物（第 25 図、図版 13）

第 2 面上層に堆積する包含層および、掘り下げ時の遺構検出時にて出土した遺物について説明する。

1 は須恵器高坏である。端部を肥厚させる。2 は須恵器坏身である。全体に歪んでいる。3 は須恵器杯身である。4 は土師器鉢である。胴部は丸みを帯びて外に張り出し、口縁部は外に開く。外面には縦方向のハケ目が施され、頸部には指頭圧痕が残り、内面はケズリが施される。5 は土師器甕である。胴部は外に開き、口縁部をやや肥厚させる。外面にはハケ目が施され、内面は縦方向のケズリが施される。6 は土師器甕である。口縁部が欠損している。胴部が丸みを帯びて外に開き、底部は丸底を呈する。胴部上半には横方向のタタキの後縦方向のハケ目が施される。内面は斜め方向のケズリが施される。頸部は緩やかに屈曲する。7 は弥生土器の小型の甕である。無頸の甕で口縁部が内側に内湾する。底部は平底を呈する。8 は弥生土器の甕である。無頸の甕で口縁部がやや外に開く。胴部下半には接合痕が残り、内面には横方向の工具調整痕が残る。9 は鋤先状口縁部を呈する甕である。10 は弥生土器甕である。11 は甕の底部である。平底を呈する。



第 25 図　第 2 面遺物包含層出土遺物実測図（1/3）

Ⅳ　まとめ

検出された遺構と遺物について以下にまとめる。

調査区内からは２面に渡って遺構面が確認された。土層観察の結果から、この一帯はもともと大肥川の氾濫原あるいは旧河道にあたり、その氾濫により安定した砂質の層が堆積したものと考えられる。その後、第２面で確認されたように、この一帯に大肥川より流れ出る水が溢れ、流路（溝）が形成される。第２面にて５条確認されたこれらの溝は、このようにして形成された流路で、出土した遺物は、その特徴から古墳時代初頭のものと考えられ、外来系の土器の特徴を有している。

１号溝から出土した甕１～７は丸みを持つ胴部が大きく膨らみ、口縁部は緩やかに内湾し、また３に至っては胴部上半分に波状沈線文を有するなど布留式土器古段階の特徴を有している。１号土坑より出土した高坏類はやや立ち上り気味に口縁部が開き、端部にかけてやや外湾させるなどその特徴は同時期の高坏類と一致している。また、５号溝より出土した鉢外面にはヘラ削りが施されるなどほぼ同時期の特徴を有している。これらの土器の特徴は、柳田氏のⅡａ期、井上氏の前期１式に相当するものと考えられ、布留式土器古段階、古墳時代初頭の時期に該当するものと考えられるのである。

つまり、この時期に大肥川の氾濫後の安定した砂層に大肥川より流れる小川のような流路が幾条にも流れていたと考えられる。隣接するＡ－２区で確認される旧河道は弥生時代後半にはほぼ流れが収束していたものと考えられることから、集落（Ｂ区）の周辺部を流れる河道に変化が生じ、この一帯にも水が流れるようになっていたものと考えられる。また、これらの流路に特徴的であるのは、祭祀行為が行われていることである。１号溝では間隔をおいてほぼ完形となる遺物が埋置されたような状態で出土し、明らかに流れ込みの遺物とは一線を画している。また、２号溝は軸を同じくする１号土坑が掘り込まれており、この土坑から出土した遺物は高坏やミニチュア土器など祭祀系の遺物で占められている。このことから、流路が流れている当該時期に何らかの祭祀行為が行われたものと考えられる。

隣接するＢ区の集落の中にほぼ同時期の古墳時代初頭に該当する遺構が確認されていることなどからもこれらの流路が集落に近接して存在していたと考えられ、また、人工的に堀り込まれた痕跡の見られない自然流路であることから、この流路は集落の水場あるいは生活用水として利用されていた可能性が考えられる。おそらく祭祀行為はこの水場に対して行われていた可能性が高く、水の確保などを祈る行為だったのではないかと思われる。

その後、大肥川は氾濫を繰り返し、第２面上層には堆積層が形成される。弥生時代全般の遺物に混じって古墳時代の遺物や７～８世紀代の須恵器や土師器も包含されていたことから、この堆積は奈良時代までの期間に該当すると考えられる。こうして形成された堆積層の上面に第１面が形成され、再び生活の痕跡が認められるようになる。

１号竪穴状遺構から出土した土師器の杯身は８世紀後半の特徴を有しており、また、１号炉跡より出土した遺物も破片資料であるものの、ほぼ同時期の所産ではないかと考えられる。また、柱穴より出土した白磁碗などの存在から中世時期まではこの第１面は継続していたものと考えられる。しかも、この時期には流路の存在は認められないことから、大肥川の流れが変わり、調査区一帯は安定した沖積地として利用されていたものと考えられる。

その後、この上面には堆積層が形成され、水田が形成される。この堆積層には８世紀後半～12世紀までの遺物が見られ、また水田層からは11世紀後半から12世紀前半の白磁が出土していることから、堆積層は第１面の時期と大きく異ならない極めて短期間のうちに形成されたと考えられ、その後水田が構築されるのである。

中世と考えられる水田は調査区南西側の傾斜地側にしか見られないことから、やや下がった窪地を利用して水田が作られ、かなり小規模な水田であった可能性が考えられる。このような平安末期から中世前期以降に構築される水田は、大肥中村遺跡、大肥吉竹遺跡などで確認されており、本遺跡で確認される水田もこれらと同時期の所産である可能性が考えられる。この一帯に形成されたとされる『大肥の荘』の形成と大きくかかわるものと考えられ、これら水田開発が遺跡周辺で行われていたことを示している。

《参考文献》

井上裕広　「北部九州においける古墳出現期前後の土器群とその背景」『児島隆人先生喜寿紀年論集古文化論叢』1991年

柳田康雄　「3、4世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻　1982年

田崎博之　「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第120　九州大学文学部　1998年

田崎博之　「Ⅲ干潟遺跡出土土器の編年－特に土師器を中心として」『干潟遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書59集　福岡県教育委員会　1980年

久住猛雄　「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究ＸＩＸ』庄内式土器研究会1995年

中島恒次郎　「九州北部」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995年

山本信夫　「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995年

山本信夫　「北部九州の７－９世紀中頃の土器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西東－』古代の土器研究会第１回シンポジウム資料集　1992年

行時志郎　「大肥中村遺跡－発掘調査概報－」日田市教育委員会　2003年

渡邉隆行　「大肥吉竹遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第48集　日田市教育委員会　2004年

第３表　出土遺物観察表①

挿図番号	器種	遺構名	石材	長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	胎土	色調	備考
第13－9	土錘	包含層	-	5.3	1.1	1.1	-	B	暗赤褐色	
第13－10	土錘	包含層	-	4.3	1.1	1.1	-	B	暗褐色	
第13－11	土錘	包含層	-	3.5	1.0	1.0	-	B	淡黄褐色	
第13－12	土錘	包含層	-	3.6＋α	1.1	1.1	-	A	褐色土	
第13－13	土錘	包含層	-	2＋α	0.9	0.9	-	C	灰褐色	
第13－14	土錘	包含層	-	1.6＋α	0.9	0.9	-	C	褐色	
第13－15	方柱状片刃石斧	包含層	緑泥片岩	６.２＋α	２.８＋α	２.１	-		-	

胎土：Ａ角閃石　Ｂ石英　Ｃ長石

第４表　出土遺物観察表②

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 12 － 1	1竪	土師器	坏							C	良	黒褐色	黒褐色	
第 12 － 2	1竪	土師器	坏					回転ナデ		B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 12 － 3	1号炉	土師器	皿					ナデ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第 12 － 4	1号炉	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C・G	良	暗褐色	暗褐色	
第 12 － 5	1号炉	須恵器	甕					格子目タタキ		B・C	良	青灰色	青灰色	
第 12 － 6	P－5	土師器	椀					回転ナデ	回転ナデ	B	良	赤褐色	赤褐色	
第 12 － 7	P－4	白磁	椀					回転ナデ・白釉			良	灰色	灰色	
第 13 － 1	包含層	須恵器	蓋	(15.8)			9.0	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第 13 － 2	包含層	須恵器	坏	(12.4)			3.9	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第 13 － 3	包含層	土師器	坏	(11.2)		(7.0)	4.7	回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 13 － 4	包含層	土師器	坏			(6.7)		回転ナデ・回転ヘラケズリ	ナデ	B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第 13 － 5	包含層	土師器	坏			(8.8)				C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 13 － 6	包含層	土師器	坏			(7.8)		回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 13 － 7	包含層	白磁	皿	(10.6)		(3.6)	2.7	回転ナデ	回転ナデ		良	灰白色	灰白色	
第 13 － 8	水田層	白磁	椀					回転ナデ・白釉	白釉		良	灰色	灰色	
第 17 － 1	1溝	土師器	甕	(17.4)			26.2	タタキ後ナデ	ヨコハケ・指頭圧痕後ナデ	A・B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 17 － 2	1溝	土師器	甕	(13.8)			19.8	ヨコハケ後ナデ・タタキ後ヨコハケ	ケズリ	A・B・C・G	良	淡灰黄褐色	淡灰黄褐色	
第 17 － 3	1溝	土師器	甕	(18.0)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 17 － 4	1溝	土師器	甕	(17.4)				－	ケズリ？	B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第 17 － 5	1溝	土師器	甕	(15.5)				指頭圧痕・ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	淡黒褐色	淡黒褐色	
第 17 － 6	1溝	土師器	甕	(17.8)				ハケ後ナデ	ハケ後ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗褐色	暗褐色	
第 17 － 7	1溝	土師器	甕					ナデ	ケズリ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 17 － 8	1溝	土師器	鉢	(12.6)			4.2	ケズリ	ケズリ後ナデ	A・B	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 17 － 9	1溝	土師器	鉢	22.5			6.3	ケズリ後ナデ	ケズリ	A・B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第 17 － 10	1溝	土師器	壺	(11.6)				指頭圧痕後ナデ・ハケ後ナデ・ナデ	ナデ・ケズリ・ハケ後ナデ・指頭圧痕	A・B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 18 － 11	1溝	弥生	甕					ハケ	ナデ	B・C・G	良	赤褐色	赤褐色	
第 18 － 12	1溝	弥生	甕					ハケ	ナデ	B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 18 － 13	1溝	弥生	高坏					ナデ		B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 18 － 14	1溝	弥生	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第 22 － 1	2溝	土師器	椀					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 22 － 2	3溝	土師器	高坏					ナデ	ケズリ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 22 － 3	4溝	土師器	高坏					ナデ	ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 22 － 4	3溝	土師器	甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 22 － 5	5溝	土師器	鉢	(16.6)				ハケ後ヨコナデ・ケズリ	ケズリ後ナデ？	B・C	良	淡黄褐色	淡赤褐色	
第 22 － 6	5溝	土師器	甕					ナデ	指頭圧痕	A・B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 24 － 1	1土坑	土師器	高坏	(20.2)				ナデ・ハケ	ハケ後ナデ・ナデ	B・C	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 24 － 2	1土坑	土師器	高坏	(17.0)				ハケ後ナデ・ナデ	ナデ	B・C	良	黄褐色	黄褐色	
第 24 － 3	1土坑	土師器	高坏	(19.8)				ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 24 － 4	1土坑	土師器	高坏	(18.5)				ハケ後ヨコナデ	ハケ後ナデ	B・C・D	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 24 － 5	1土坑	土師器	高坏	(18.6)				回転ナデ	ハケ後ナデ？	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 24 － 6	1土坑	土師器	高坏					ハケ後ナデ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第 24 － 7	1土坑	土師器	高坏					ハケ後ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 24 － 8	1土坑	土師器	高坏					ナデ	ケズリ？	A・B・C	良	黄褐色	黄褐色	
第 24 － 9	1土坑	土師器	高坏					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 24 － 10	1土坑	土師器	椀	(16.8)				ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 24 － 11	1土坑	土師器	椀	(15.6)				ハケ	ハケ後ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第 24 － 12	1土坑	土師器	甕					ハケ	ハケ・ケズリ	B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第 24 － 13	1土坑	土師器	手捏土器					指頭圧痕	指ナデ	B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 25 － 1	包含層	須恵器	高坏			(10.2)		回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第 25 － 2	包含層	須恵器	杯					ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第 25 － 3	包含層	須恵器	坏			(10.5)		回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第 25 － 4	包含層	土師器	甕	(15.7)				ハケ後ナデ・ハケ後ナデ	ハケ・ケズリ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	煤付着
第 25 － 5	包含層	土師器	甕	(15.0)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 25 － 6	包含層	土師器	甕					タタキ後ハケ・不定方向ハケ後ナデ	ケズリ・ナデ	A・B・C・D	良	暗褐色	淡灰黄褐色	
第 25 － 7	包含層	弥生	甕					ハケ	ナデ	B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	黒班
第 25 － 8	包含層	弥生	甕	(11.8)				ナデ	ナデ後ハケメ次工具調整	B・C・G	良	黄褐色	黄褐色	接合痕残る
第 25 － 9	包含層	弥生	壺	(31.9)						A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 25 － 10	包含層	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	暗褐色	暗褐色	
第 25 － 11	包含層	土師器	坏			7.1		回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	

法量の単位は cm。（　）書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

第 1 面完掘風景（東から）

第２面全景（真上から）

写真図版 2

第２面北側（真上から）

第２面南側（北から）

1号掘立柱建物（南西から）

1号炉跡

調査区土層①

写真図版 4

調査区土層②

調査区土層③

1 号溝完掘（北から）

1 号溝土層

1 号溝土器出土状況①

1 号溝土器出土状況②

1 号溝土器出土状況③

1 号溝土器出土状況④

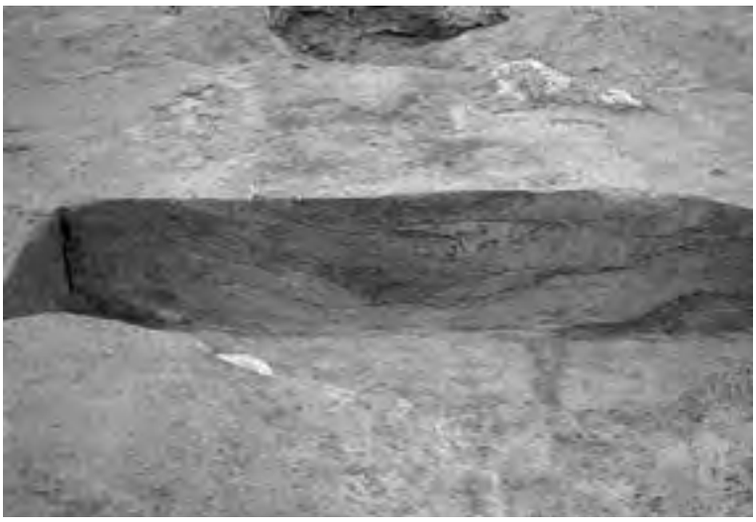
1 号溝土器出土状況⑤

1 号溝土器出土状況⑥

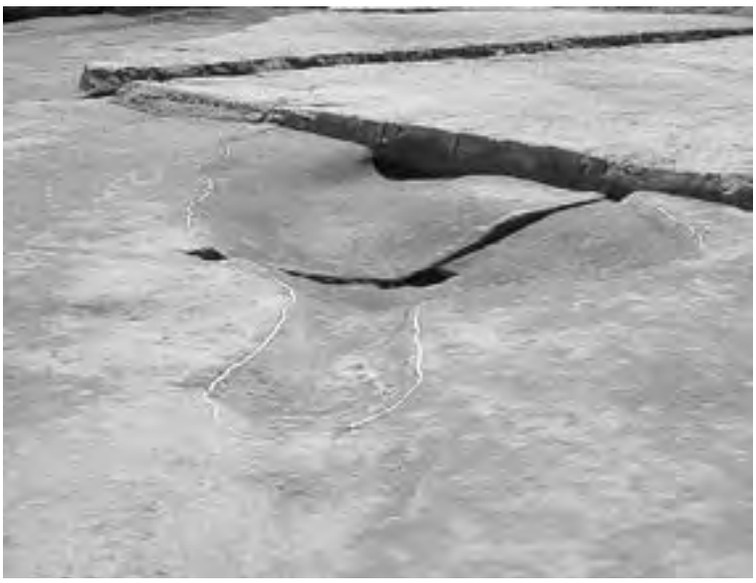
1 号溝土器出土状況⑦

2 号溝完掘（東から）

2 号溝土層①



2 号溝土層②



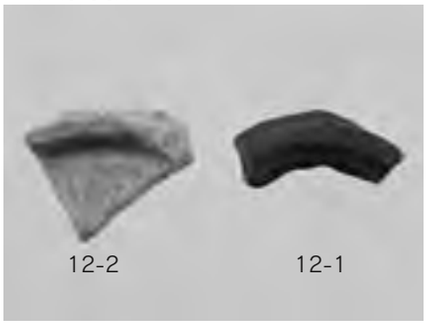
3 号溝完掘（北から）

3 号溝土層

1 号土坑完掘（南から）

1 号土坑土器出土状況

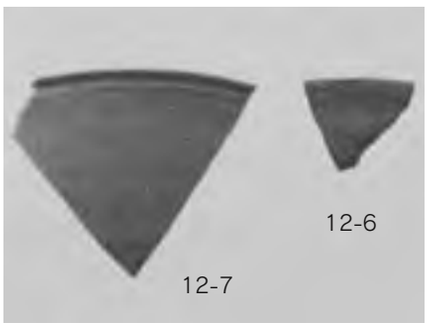
写真図版10


12-2
12-1

12-3

12-4

12-5


12-6
12-7

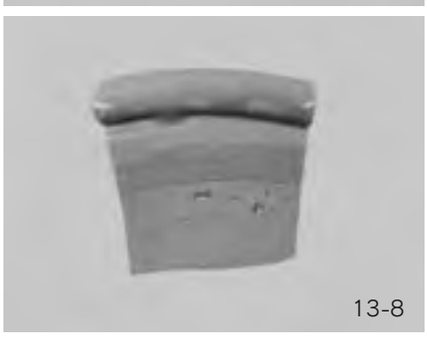
13-1

13-3

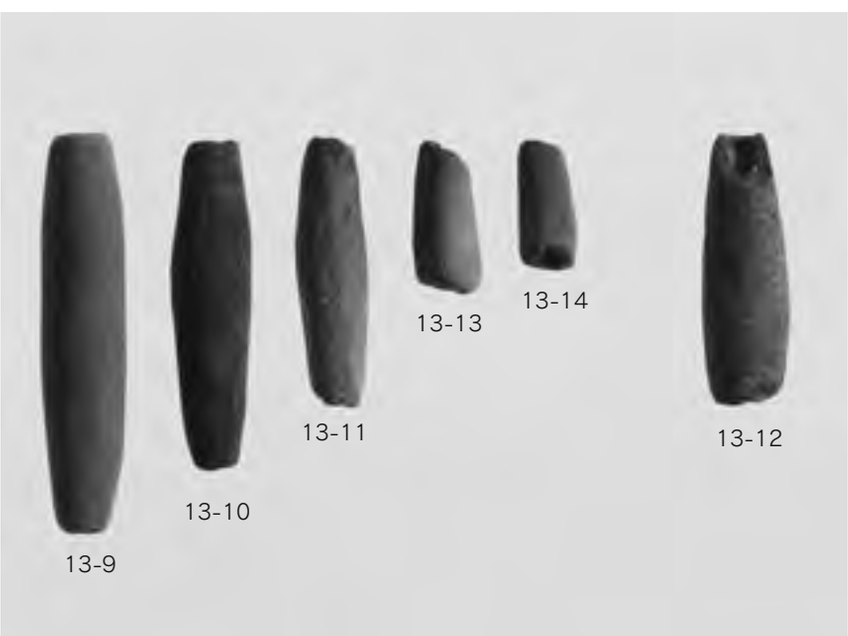
13-5

13-2

13-7


13-8

13-15


13-9
13-10
13-11
13-13
13-14
13-12

17-1

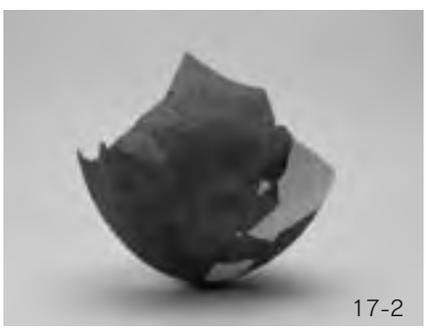
17-3

17-4

17-2

17-5

17-6


17-2

17-7

17-8

17-10

17-9

17-11

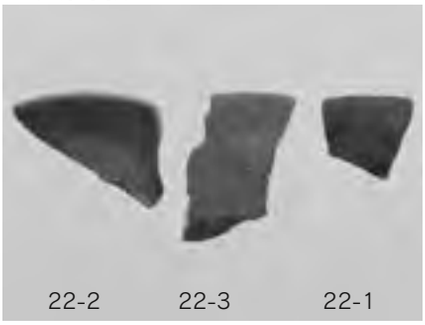
17-10

17-12

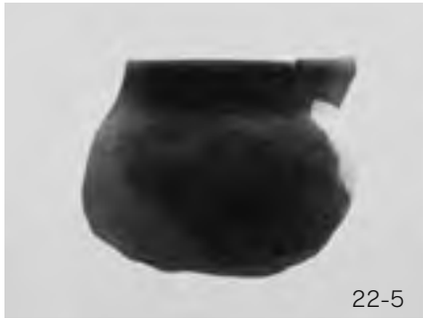
17-13

17-14

写真図版12


22-2 22-3 22-1

22-4


22-5

22-6

24-1

24-2

24-3

24-4

24-5

24-6

24-7

24-8

24-9

24-10

24-11

24-12

24-13

25-3

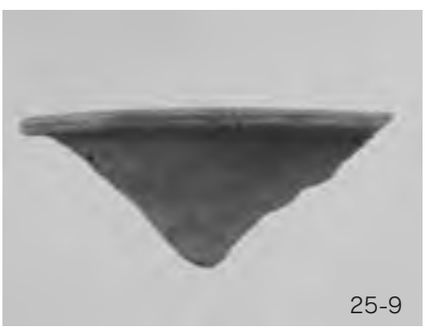
25-4

25-5

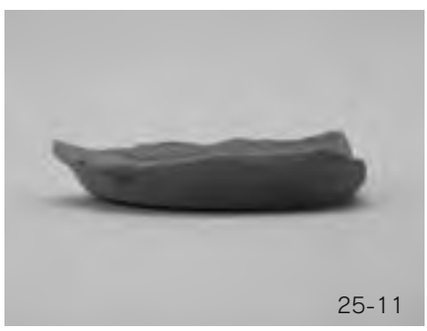
25-6

25-7

25-8


25-9

25-10


25-11

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおひいせき
書名	大肥遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第50集
編著者名	渡邉隆行
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877－0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2004年3月16日

所収遺跡名（ふりがな）		所在地（しょざいち）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
大肥遺跡（おおひいせき）	A-1区	日田市（ひたし） 大字大肥字方司口（おおあざおおひあざほうしぐち） ほか	44204－6	651004	33°21'34.64″	130°52'53.64″	20020527～ 20020730	2,800㎡	ほ場整備

所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大肥遺跡	A-1区	集落跡	古墳 古代 中世	溝　5条	石器、土師器、須恵器、 弥生土器	
				土坑　1基		
				竪穴状遺構　1基		
				掘立柱建物　1棟		

大肥遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書
第50集
2004年3月19日

編　集　877-0077　大分県日田市南友田町516-1
日田市教育委員会文化課

発　行　877-8601　大分県日田市田島2-6-1
日田市教育委員会

印　刷　877-0086　大分県日田市二串町345-3
日田時報紙器印刷（株）